❽

自由大学運動研究の軌跡

自由大学運動は、1920年代はじめから30年代はじめにかけて長野県・新潟県を中心に全国各地で展開された地域民衆の自己教育運動として知られている。この自由大学運動についての研究は、1960年代後半から活発化したが、上田自由大学が創設されてから100年が経過する機会に、これまで自由大学運動研究がどのように進められてきたのかを振り返ってみたい。

１．1970年以前の自由大学運動研究

(1) 宮原誠一による注目

戦後、自由大学運動についていち早く注目したのは、宮原誠一の「日本の社会教育」(『世界の教育』9、共立出版、1960年）であった。宮原は、自由大学運動を大学拡張運動の一形態としてとらえ、大正期における官製の成人教育に比較して「はるかに大学拡張の実体をもち、しかも純粋な民間運動であった点において世界的にも稀少な事例」であったと、高く評価した。しかしこの段階では、まだ実証的な研究はされていなかった。

(2) 宮坂広作による本格的研究

自由大学運動について最初に本格的な検討をくわえたのは、宮坂広作の「戦前における社会教育運動の遺産について(1)～(4)」(『月刊社会教育』1962年11月号・12月号、63年2月号・3月号）であった。この論文はのちに『近代日本社会教育史の研究』(法政大学出版局、1968年）に敷衍され収録された。

宮坂は、このなかで、大正期における社会教育の官製化に対抗する民間の自主的な成人教育運動として自由大学運動を位置づけ、「自由大学運動は官製の「成人教育講座」のもっている天降り的、教化的性格と、一般の講演会、講習会のそなえている慈恵的、実用的性格とに反対して、自由な人格の自己形成と真実を探求する批判的知性の涵養をめざして、自主的な学習機関を組織した」ものと評価したが、同時に、「労働と教育との関係を単に外的に結びつけるだけで、「労働しつつ学ぶ」ことじたいに「学校としての本義」を置き、結局生産労働に内在する問題と講義内容とが遊離するところから、一種の教養主義に転落してしまった」と、教養主義の限界を指摘した。この点について宮坂は、別の論稿「社会教育の体制化と民衆教育運動」(宮原誠一編『教育史』東洋経済新報社、1963年）においても、「自由大学がほんらいもっていた教養主義的、人格主義的性格は、運動の大衆化をさまたげ、「一部の好学徒の研究・修養機関」たるにとどまらせる原因であり、それは労農階級の社会的解放に必要な武器としての理論を提供する民衆教育機関にはなりえなかった」とのべている。また、その後の「土田杏村と自由大学運動」(『教職課程』第5巻第5号、1979年6月、のち上沼八郎編『人物近

代教育小史』協同出版、1981年、『宮坂広作著作集』第1巻、明石書店、1994年、に再録）では、自由大学運動の歴史的意義として、「自由大学を成人教育の事業とみなしたとき、当時さかんに行われた各種の成人教育事業と対比して、もっとも質の良いものであった」ことを指摘し、「学校が学歴を取得するための施設になり下がり、上級学校へ進学するための受験準備をする場になっている」ことへの批判に、その現代的意義をみている。そして、「自由大学が自治・自立を誇れたのは、富裕な階層の聴講者がいたからである」としつつ、「現実を変革するための実践から遊離した教養教育は、しょせん解放のための教育にはなりえなかった」と、その限界を指摘している。

この宮坂の、当時の社会教育の体制化に対抗する民衆の自主的な成人教育運動として自由大学運動を位置づけつつも、教養主義の限界をまぬがれなかったとする見解は、その後の自由大学研究に定説的見解として大きな影響を与えていった。

なお、この時期に自由大学運動を取りあげたものに、伊東正代「自由大学運動序説－民衆の教育要求とその組織化の論理－」（『社会問題研究』第4号、1967年）がある。伊東論文は、民衆の学習要求が「どのような状況で発生し、どのように展開されたのか」を明らかにしようとしたものである。そのなかで、農村青年の学習要求を「内面的自我形成の要求」とし、それは青年たちの離農・離村が大きな社会不安として問題されはじめ、また「養蚕業をはじめとする農産物の商品化が進み、従って地域社会の資本主義社会の進行によって、かつての農村共同体的意識が崩壊し、激動する社会の中で、孤立感からのがれるために自らの展望や個人的な「自我意識」が強烈に求めはじめられた」ことによる、と指摘したが、その実証はきわめて不十分なものに終わっている。

(3) 上木敏郎の土田杏村伝記研究

上木敏郎は、土田杏村の伝記的研究を進めるなかで、土田が理論的指導者として深く関わった自由大学運動についても関心を持ち、自身の個人雑誌『土田杏村とその時代』第7・8合併号（1968年）を「自由大学運動」の特集号とし、自由大学関係者の回想を収録した。また、土田の生い立ちから大正期までをまとめた「若き日の土田杏村(1)～(4)」（『成蹊論叢』第6～8号、第10号、1967年～1971年）の中で、地道な史料収集をもとに土田と各地の自由大学との関わりをあとづけた。

上木は、のちに『土田杏村と自由大学運動－教育者としての生涯と業績－』（誠文堂新光社、1982年）を刊行し、土田の生涯を自由大学運動との関わりを中心にまとめている。

２．1970年代の自由大学運動研究

(1) 多様な研究の活発化

自由大学運動に対する関心は、1970年代にはいると、”大学紛争”を契機として大学のあり方が問われ、また住民運動のたかまりとともに住民の学習運動が活発となり社会教育のあり方が問われる中で急速にたかまり、それにともなって多様な研究が蓄積されるとともに、研究の前提となる史資料類も数多く発掘・公開され、研究の裾野が一気にひろがった時期であった。

松村憲一の「自主的成人活動としての「上田自由大学」運動とその限界－大正デモクラシー理念にもとづく民衆教育－」（早稲田大学社会科学研究所プレ・ファシズム研究部会編『日本のファシズム－形成期の研究－』早稲田大学出版部、1970年）は、大正期における国家の国民教化政策との対抗関係において自由大学運動をとらえ、「文部省（官製）による青年、成人教育施策が本格的に行政上のレベルで実施され、国民の思想善導への方向が明確に打ち出されて来たこの時期、それに対する民

衆の自由の主張（プロテスト)」として自由大学を位置づけている。しかし同時に、土田杏村などの自由大学理念を分析する中で、宮坂と同様に自由大学運動の限界として教養主義を指摘している。すなわち、「自由大学理念を形成し実践した発起人および講師」には「「日本の現実の生活的土壌や、実感的世界に根を下ろさない、いわゆる知識の断片でしかない教養を、インテリゲンチャの教養」として生活実感を含めたイデオロギーから超絶した次元における内省、人格自律を教育目的の究極とする方法論に過ぎない傾向を端的に指摘できる」とし、さらに聴講者のがわには、「その獲得した智識を如何に生活化し得たかの観点からこれを評価する」とき、その運動は「単なる学問への要求、向学心を満たすために自主的に講座を選択したと考えられる一面もある」と述べ、自由大学の啓蒙が聴講者にとって必ずしも現実変革の力となり得なかったのではないか、と主張している。この松村の評価は、基本的には宮坂の見解を継承したものであるが、国家の国民教化政策との対抗関係において自由大学運動をとらえようとしたところに、その特徴がある。

この国家の国民教化政策に対する民衆の自由の主張として自由大学運動を位置づける松村の自由大学理解を批判し、自由大学運動を大正デモクラシー状況に置ける文化との関連において位置づけようとしたのが、竹村民郎の『独占と兵器生産－リベラリズムの経済構造－』（勁草書房、1971年）であった。竹村は、「新しい世紀とともに、支配階級は階級同盟、階級の政治ブロック、すなわちブルジョア民主主義という新しい政策をとり始めた」（グラムシ）という条件下に、クローチェ的大知識人である吉野作造たちが地方の中小知識人の価値観を支配してゆく文化の組織と機能を論じ、自由大学運動を「階級闘争の視点を捨象させた抽象的な学問体系の受容を自己目的化するもの」としてとらえ、「自由大学の組織の拡大にのって、人道主義的世界観－民本主義は空気の如く県内外の中小知識人に浸透し」、「その結果として大衆はみがからを解放する道から実際には隔離され」た日本の現実の例証とした。

大槻宏樹の「自由大学運動における社会教育論」（『学術研究』第19号、1970年）は、自由大学運動の中で展開された、当代社会教育体制批判、労働と教育との結合論、生涯教育論、人間教育論、社会の改造とプロレットカルト論、自由大学の組織と構想について検討したものである。大槻は、その中で、「学校教育中心の教育から、社会教育中心の教育体制への構想・展望の中にも、生き生きとした自由大学の息吹が感じられ」るにもかかわらず、「それらの主張が必ずしも結実をみたわけではなかった」のは、「教育と労働との結合を唱えながらも、生産活動を妨げない時間を利用した教育にとどまっているかぎりは、労働の中にその原理を導き出すことが不可能で」あり、「そこに自由大学運動自体がやがて教養主義に埋没していく問題が潜んでい」た、と述べ、宮坂・松村と同様に、教養主義の限界を指摘した。大槻は、この論文の中で、自由大学年譜を作成し、各地の自由大学における講座一覧を明らかにしたが、この年譜には史料操作の誤りとその後の史料発掘によって補正すべき個所がいくつか指摘できる。

自由大学研究が、宮坂による本格的研究以来、運動の理論的支柱である土田杏村の自由大学理念ないしは教育思想の分析を中心としたものに終始していた一方で、この時期には、さきの大槻論文の自由大学年譜をはじめ、森山茂樹「魚沼・八海両自由大学の成立と経過－大正期自由大学運動研究への試み－」（東京都立大学『人文学報』第82号、1971年)、上木敏郎「土田杏村と自由大学運動－信濃自由大学を中心に－」（『思想の科学』1972年第2号)、山野晴雄「上田自由大学運動研究ノート」（『民衆史研究』第10号、1972年)、同「昭和初期の上田自由大学」（『自由大学研究』第1号、1973年、のち「昭和恐慌と自由大学運動－上田自由大学を中心に－」と改題・加筆して『長野県近代史研究』第6号（1975年）に再録)、同「伊那自由大学の成立と経過」（同編『伊那自由大学関係書簡』（自由大学研究会、1973年)、同「伊那自由大学の歴史」（『月刊社会教育』1975年9月号)、小川利夫「自由大学運動」（国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第7巻、1974年、同『青年期教育の思想と構造』

勁草書房、1978年に再録）など、詳細な実証的研究が進められていった。

森山論文は、それまでほとんど知られていなかった新潟県の自由大学運動を発掘したものであり、上田自由大学を中心としていた自由大学研究に、新たな材料を提供するものであった。

上木論文は、土田杏村との関連においてであるが、信濃自由大学（のち上田自由大学）の形成過程を中心に詳細な叙述を試みたものである。論文は、別稿「若き日の土田杏村（2)」(『成蹊論叢』第7号、1968年）より自由大学運動に関する部分をまとめたものであるが、信濃自由大学の成立を信濃黎明会修養部の発展とみる従来の理解を実証的に批判し、神川村における哲学講習会の開催の中から自由大学の構想が具体化していったことを明らかにした。

山野論文のうち上田自由大学に関する論文は、上田自由大学の形成過程から1921年の発足、学習活動の展開、26年の講座中断、28年の再建、31年の自然消滅までを、実証的に明らかにしたものである。上田自由大学についてはこれまで、上田市立図書館所蔵の『自由大学雑誌』『信濃自由大学の趣旨及内容』や猪坂直一『回想・枯れた二枝－信濃黎明会と上田自由大学－』（上田市民懇話会、1967年）などの史料に依拠して叙述されてきたが、その叙述を塗り替える、新たな史実を明らかにした。とくにタカクラ・テルが中心となった昭和恐慌期の状況を明らかにしたことは、自由大学研究に新たな視点を提供するものとなった。また、伊那自由大学に関する論文は、実証的な研究が行われてこなかった伊那自由大学の歴史を、新たな史料発掘をもとに明らかにしたものであった。

小川論文は、国立教育研究所上田調査団による史料調査と最近の自由大学研究の成果を取り入れ、自由大学運動を概観したものであるが、その中で、自由大学運動の時期区分を試みている。すなわち、前期を上田自由大学が正式に発足してから中断せざるをえなくなるまでの数年間（1921年11月～26年3月)、後期をその再建から終焉にいたるまでの数年間（1928年3月～30年1月）とし、前期と後期との間には相互に交錯する前期から後期への移行期があり、1924年の自由大学協会の成立前後から上田自由大学が再建されるまでの数年間としている。そして「自由大学がその発足から中断、さらにその終焉にいたるまで一貫して背負っていた歴史的課題は、要するに自由大学における「自由」の原則的かつ実践的な認識とその具体化にかかわる問題であった」とし、この問題をめぐって1924年前後から自由大学運動の内外において亀裂が生じてきたことをもって、前期と後期をわけるメルクマールとした。この時期区分は、山野の研究成果に立脚したものであるが、これまで時期区分すること自体考えられてこなかっただけに、自由大学理解に新たな視点を導入するものであった。

(2) 「ツチダ自由大学」から「タカクラ自由大学」へ

これまでの自由大学研究、とくに社会教育研究者に共通してみられる方法は、理論的指導者であった土田杏村の自由大学理念や教育思想を分析し、そこから自由大学運動の評価をするという方法であった。このような土田の視点からのみの研究方法を批判し、自由大学の遺産を今日に生かしていくための立場から、”実践”への視点を自由大学運動の中にさぐりあてていくことを主張したのが、小林利通の「幻想としての自由大学－解釈のためでなく、変革のために－」(『自由大学研究』第1号、1973年）であった。小林は、土田「杏村の思索や行動の軌跡を逐い、自由大学運動をその角度からのみ切りとって考察するとすれば、運動のダイナミズムは欠落してしまう」と、これまでの研究方法を批判し、上田自由大学については、「1921年秋の建学の精神－教祖とその弟子たち［注、土田杏村と猪坂直一たち－引用者]－のみに設定した視座ではなく、発展し変貌してゆく全体の流れとして運動をとらえ」ること、「端的に言えば、ツチダ自由大学として今日はいささか観光的にすらなっている伝承をタカクラ自由大学という視点で再構成してみること」を提起したのである。（なお、小林の没後、『日本近代史の地下水脈をさぐる－信州・上田自由大学への系譜－』梨の木舎、2000年が刊行されている。）

この小林の提起をうけ、自由大学運動の歴史を再構成し素描したのが、山野晴雄の「自由大学運動と国民の学習権」(『民衆史研究会会報』第2号、1974年)である。山野は、大正期の自由大学運動が「学習と実践とが分離したいわゆる教養主義の傾向を回避すること」ができず、「土田杏村の構想した自由大学の理念も、運動が全国に拡大してゆくにともなって、矛盾を露呈し」、1924年前後から自由大学運動に"亀裂"が生じたこと、ついで昭和恐慌期には自由大学運動が社会運動とも結びつき、伊那自由大学千代村支部の動きを例に、地域変革と結びついた学習運動の展開を構想していったことを明らかにした。そして、自由大学運動は「民衆自身の知的欲求の向上と自己成長のための学習運動」から「地域変革のための学習運動」へと発展していった民衆教育運動であると評価した。そのことをより詳細に論じたものに、山野晴雄「自由大学運動の生成とその展開」(碓井正久編『日本社会教育発達史』[講座現代社会教育Ⅱ]亜紀書房、1980年)などがある。

(3) 教養主義をめぐる問題

自由大学運動が当時の社会教育の体制化に対抗する民衆の自主的な学習運動であった点に大きな意義を認めつつも、教養主義の限界をまぬがれなかったとする見解は、宮坂広作にはじまり、松村憲一、大槻宏樹らによって受けつがれてきた。これに対して山野は、大正期の自由大学運動は教養主義の傾向を濃くしていったが、昭和恐慌期には教養主義を克服しいゆく動きがみられ、地域変革と結びついた学習運動の展開が構想されていった事実を明らかにし、問題を動的にとらえることを主張した。

一方、佐藤忠男は、「土田杏村と自由大学」(『朝日新聞』1973年8月6日付朝刊、思想史を歩く欄、のち朝日新聞社編『思想史を歩く』下巻、朝日新聞社、1974年に収録)の中で、「教養主義は、権威ある教養と引き換えに社会的な地位を保証してやるというような学歴制度と結びついているかぎり、まことにいやらしいものであると言わざるを得ない。しかし土田杏村がそこでめざしたのは、学歴制度などによって民衆の知性が他律的につくりあげられてゆくことに対抗して、民衆が真に自律的な知性を持つようになることを助けることであった。すでに志が違えば、形は同じような教養主義でも実質は違う、と言わなければならない」と述べ、自由大学の限界として批判されてきた教養主義について積極的な意義をあたえた。

また、この佐藤の見解を継承し、小林利通が「ツチダ自由大学」を教養主義として批判したことに対して疑義をとなえ、教養主義に積極的な意義をあたえようとしたのが、黒沢惟昭であった。黒沢は、「自由大学研究の現段階」(『月刊社会教育』1973年11月号、のち「上田自由大学と若干の問題点」と改題して、同『社会教育論序説』八千代出版、1981年に収録)の中で、「教養主義」の内容が問われなければならないとし、「地位の向上と結びついた権威的な教養は拒否されるべきであるが、民衆が与えられた「教養」を批判するために自ら求める教養は同じ教養でもその意味はまるで異なったものになろう」と述べている。それは、民衆にとっての教養の意味を積極的に評価する立場から、自由大学における教養の重視は限界とするにあたらないとしたのでる。

さらに別の論稿「自由大学研究についての覚書－教養概念をめぐって－」(『一橋論叢』第71巻第5号、1974年、同『社会教育論序説』八千代出版、1981年に収録)において、この教養主義をめぐる問題により詳細な検討をくわえ、「当時の講義の実態から推測すれば、恐らくそれは、なんらかの点で聴講者の「生活」ときり結んでいたように思えてならない」のみならず、土田杏村の思想に人間変革と社会変革を統一してゆく「発想が全くみられないとする宮坂説には疑点が残る」とし、「自由大学運動は、「教養主義」(「非実践性)という批判にもかかわらず逆に、きわめて実践的であった、少なくとも、そうである可能性をはらむものであった」と、結論づけている。　黒沢は、従来の研究が教養主義に陥込んでいく原因の究明に傾斜し、その原因として「聴講者の生活現実(労働)と講義内容が遊離していた点」をあげているが、「いずれの論者も、遊離の内容、要因については直接に説明

をなしえておらず」、土田杏村の「思想からいわば演繹的に「教養主義」埋没の必然性を説明するという手法をとっている」と批判している。この指摘は正当であるが、しかし黒沢の場合にも、自由大学の講義が聴講者の「生活」ときり結んでいたという指摘にもかかわらず、その実証はきわめて弱いものであった。この段階では、自由大学での学習が聴講者にどのような影響を与え、地域にどうかかわっていったのかを明らかにするまでにはなっていなかった。

(4) 新潟県の自由大学運動をめぐる問題

新潟県の自由大学運動については、森山茂樹が「魚沼・八海両自由大学の成立と経過－大正期自由大学運動研究への試み－」（東京都立大学『人文学報』第82号、1971年）において本格的な研究が行われ、山野晴雄「新潟県における自由大学運動(1)(2)」（『自由大学研究』第3号、1975年、第4号、1976年）では、魚沼自由大学について、運営者たちの分裂が起こり、夏季大学時代からの商工業に従事する響倶楽部の青年たちが手を引き、1924年秋以降は教員の学習運動としての性格を強くしていったこと、23年から26年までの4年間、堀之内村当局から毎年100円の補助金を受けており、他から金銭的援助を受けないことを原則としていた自由大学の立場からの逸脱がみられたことを明らかにした。

これに対して独自に史料調査を進めていた佐藤泰治は、渡辺泰亮宛の書簡類や「新潟毎日新聞」「北越新報」などの新聞記事、林広策が保存していた魚沼自由大学関係文書などを収録した資料集、小出町教育委員会編『八海（魚沼）自由大学書簡集』（小出町文化財調査資料第1輯、1977年。同編『小出町歴史資料集』第1集［近代教育編Ⅱ］、1981年に改訂再録）を刊行するとともに、「魚沼・八海自由大学発祥の考察」（『魚沼文化』第11号、1978年）や「本県自由大学運動の研究」（『新潟県史研究』第7号、1980年)、「越後の自由大学をめぐる二・三の問題」（『自由大学研究』第6号、1979年）において、新潟県の自由大学運動を検討している。佐藤は、その中で、「聴講者自らが精々若干の物質的持ち出し持出しも敢えてやった」という意味での「自主的な学習機関」ではあったが、講義内容も「娯楽的要素を加味」するなど「越後的手直し」がなされている、ときわめて低い評価をおこなった。堀之内村当局から補助金を受け取っていたことについても、山野が「地域において自由大学が一定程度の”市民権”をえていたことを示すもの」と評価したことに対しても、佐藤は、本来的には反官製でなければならない自由大学が、魚沼自由大学の場合には、その性格が無原則的で曖昧であり、したがって村当局も自由大学と官製講習会を同類視していたがゆえに補助金を出したのであり、補助金の支出は、自由大学の「本質的展開と遠いが故の歓迎と考えるべきで、「自由大学」そのものとしては市民権は得られなかったと考えるべきではないか」と批判した。この佐藤の批判に対し山野は、「魚沼自由大学の性格－佐藤泰治氏の批判に答えて－」（『自由大学研究』第6号、1979年）で、「魚沼自由大学を官製講習会のなかに埋没していったものとみるよりは、一定の思想的影響を地域民衆に与えた学習運動であった」とし、ただ「自由大学が地域に浸透していった証拠を、補助金の支出にみるのは一面的であり、魚沼自由大学の歴史の全体から評価すべきで」、今後の研究課題とした。

一方、安達朋子は、「新潟県における自由大学運動（上）（下)」（『自由大学研究』第8号、1983年、第9号、1986年）で、「補助金の支出を反官に欠ける要素として捉え、自由大学の没個性ぶりを表しているとみるのはどうであろうか」と、佐藤の評価を批判し、「村当局が自由大学に好意的であった」ことを明らかにし、また、受講者の側から見た自由大学像という視点から検討し、受講者へのアンケート調査などをもとに、八海自由大学は青年団との関係が深かったことを明らかにし、「封建色の濃い魚沼の地に、新しい教育の風を送りこみ、たとえ微力ではあれ、性別、職業に関係なく聴講した人々の胸の中で、細く長く生き続けている」点に、自由大学が果たした役割を評価している。

なお、佐藤は、「川口自由大学序論」（川口町歴史民俗研究同好会『会誌』第2号、1980年）におい

て、これまで知られていなかった川口自由大学について明らかにした。

その後、磯部定治が「越後の自由大学」(『長岡郷土史』第41号、2004年)で魚沼、八海、川口の新潟県内の自由大学をまとめているが、とくに目新しいものはない。

(5) 伊那自由大学をめぐる問題

伊那自由大学については、宮坂広作が『近代日本社会教育史の研究』(法政大学出版局、1968年)において検討したのが最初であった。その中で宮坂は、伊那自由大学も基本的には土田杏村の思想的な立場に一応はかかわっていて、教養主義の結果をまぬがれなかったが、現実には下伊那地方の青年運動、とくに自由青年連盟等の青年運動の上に立脚しなければならなかった限りにおいて、実践的な性格をおびざるをえなかったとし、「各地にできた自由大学の中でも、最も実践的な性格をもっていた」と評価した。

この実践的な性格をもっているという宮坂の指摘に対して、基本的には土田杏村の自由大学構想を継承しているという立場に立ち、自由青年連盟等の社会主義青年運動の側からは「反動的教育運動として批判されてきた」とする見解を示したのものとして、松村憲一「自主的成人活動としての「上田自由大学」運動とその限界－大正デモクラシー理念にもとづく民衆教育－」(早稲田大学社会科学研究所プレ・ファシズム研究部会編『日本のファシズム－形成期の研究－』早稲田大学出版部、1970年)、上木敏郎「解題　土田杏村と自由大学」(『教育労働研究』第1号、1973年)、中野光「教育の自由と解放を求めて」(金原左門編『自由と反動の潮流』日本民衆の歴史第7巻、三省堂、1974年)などをあげることができる。たとえば上木は、「この地の自由大学は、自由青年連盟を脱退した横田憲治や平沢桂二らを中心に結成されたものであったため、一部の急進的な青年たちからは、しばしば「反動教育運動」などと罵倒されていた」と述べている。

これに対し山野晴雄は、「解説　伊那自由大学の成立と経過」(『伊那自由大学関係書簡』自由大学研究会、1973年)や「伊那自由大学の歴史」(『月刊社会教育』第19巻第9号、1975年9月)の中で、伊那自由大学の全体の流れを明らかにするとともに、土田杏村と伊那自由大学発起者との関係について、土田の自由大学構想と発起者の見解との間にはくい違いがあったこと、横田憲治・平沢桂二はＬＹＬを脱退したのちに伊那自由大学を設立したが、地域の青年運動や社会主義運動と結びつきながら学習運動を展開したこと、昭和恐慌期の千代村支部の動きの中には、「地域変革のための学習運動という側面を強めていった」ことを明らかにし、伊那自由大学の動きを積極的に評価した。同様の指摘は、小林千枝子「伊那自由大学について」(『自由大学研究』第5号、1978年)にもみられる。

一方、佐々木敏二は、下伊那郡の社会主義運動を詳細にあとづけた労作『長野県下伊那社会主義運動史』(信州白樺社、1978年)において、伊那自由大学についてふれ、「伊那自由大学は創立当初はプロレットカルトを標榜した」が、1924年の「ＬＹＬ検挙事件から、右旋回をはじめ、プロレットカルトの姿勢を次第に失い、少人数の学習会へと変質していった」とし、千代村支部の動きについても「これはもはや当初の自由大学ではなくて、かつての村青の特別講座を代行する性格のものである」と積極的な評価はしていない。のちに佐々木は、「長野県における社会運動と自由大学運動」(『自由大学研究』第7号、1982年)において、従来の自由大学研究が、社会教育学の枠組みの中で土田杏村の「理念がどう具体化されたのかという理念中心の研究」が中心で、自由大学の受講者がどのような社会構成であり、また聴講者たちがその地域にどういう影響を与えたのかという面での研究が遅れていることを指摘したうえで、下伊那の場合、自由大学の創設者である横田憲治・平沢桂二・須山賢逸の3人と自由大学連盟・ＬＹＬとの関係、創設者と土田との見解の違い、あるいは創設者相互間の違い、ＬＹＬ検挙事件後の伊那自由大学パンフレットの評価、千代村支部の活動の評価などを検討すること、自由大学と社会運動・青年運動との関連について研究を深める必要があることを指摘した。

そして、佐々木は「土田杏村と自由大学－恒藤恭、山本宣治との関係を中心に－」(『立命館大学人文科学研究所紀要』第65号、1996年）において、自由大学運動にかかわりを持った土田杏村と山本宣治、恒藤恭との関係を解明しつつ、とくに伊那自由大学と社会運動・青年運動との関連を明らかにし、土田がプロレットカルト論を紹介し、山宣が魚沼自由大学に出講した頃から、土田と山宣とは急速に親しいものとなるが、伊那自由大学では、土田のコメニウスの学校の本義から説く「設立の趣旨」と須山のプロレットカルトを目指す姿勢には違いがあり、ＬＹＬ検挙事件後に自由大学がパンフレットを出して自由青年連盟とは関係ないとの姿勢を示し、横田・平沢ら土田に近い自由大学のグループは政治研究会下伊那支部ら社会主義青年運動に関わる青年たちの要求と次第に合致しなくなり、聴講者を減らし、飯田での開講ができなくなったことを明らかにした。

明治大学政治経済学部日本政治思想史演習室（後藤総一郎ゼミ）では、共同研究「民衆と学問－伊那自由大学の思想史的考察－」(『思想史研究草稿』第5号、1982年）をまとめ、清水一明「土田杏村の思想と実践」、林俊大「大正デモクラシーと信濃自由教育」、阿部洋典「下伊那社会主義運動史」、竹花佳江「伊那自由大学の歴史と思想」、波多江貴代美「羽生三七論」を収録している。このうち伊那自由大学を直接取り扱った竹花論文は、「民衆の側から学問要求とその学問の場を実現していった先駆的経験」として伊那自由大学の歴史を要領よくまとめたものであるが、聴講生の一人楯操のその後の軌跡を明らかにしているのが注目される。

(6) 土田杏村の自由大学理念・教育思想

自由大学運動の理論的指導者である土田杏村の自由大学理念・教育思想については、宮坂広作の『近代日本社会教育史の研究』(法政大学出版局、1968年)、大槻宏樹の「自由大学運動における社会教育論」(『学術研究』第19号、1970年）で検討されてきた。のちに大槻は、「戦前自己教育論の思想構造」(同編『自己教育論の系譜と構造－近代日本社会教育史－』早稲田大学出版部、1981年）において、戦前の自己教育論を「公民型」「社会教育施設型」「社会化型」「共同社会型」の4つに類型化し、それぞれのタイプに属する人物の自己教育論について検討しているが、とくに「共同社会型自己教育論」として土田杏村の自己教育論を取りあげ、「杏村の自己教育は、自己教育の共同化であり、近代公教育を超克するものであり、現代自己教育論の種々相は、杏村の自己教育論の復権として位置づけられよう」と、その思想を積極的に評価している。

その後、吉澤潤が、「”自由大学運動”と土田杏村の教育思想」(『教育学雑誌』第10号、1976年）で土田杏村の自由大学理念と教育思想を検討し、「生涯教育」という教育の本流を説き、限定され、特権化されている「学校教育万能」の教育観の誤りを痛烈に衝いていること、「教育即生活、生活即教育という教育の基本原理を正しく提示していること」を高く評価すべきである、としている。また、石津靖大は、「土田杏村のプロレットカルト論」(『女子聖学院短期大学紀要』第8号、1976年、第9号、1977年）で土田のプロレットカルト論を検討し、従来自由大学の限界として指摘されていた教養主義について、「教養主義の形式よりもその時点における教養主義の意義役割という実質を問わなければならない」とし、土田の教養主義は学歴主義の教養主義に対して民衆の自律形成をめざしたものと評価している。

稲葉宏雄は、「大正デモクラシーと中等教員の増大」(中内敏夫・川合章編『日本の教師2－中・高教師のあゆみ－』明治図書、1970年）の中で自由大学についてふれ、土田の教育思想を分析したうえで、「自由大学は民衆自身の自己成長、自己改善のために営まれる民衆教育機関であり、その経営、カリキュラム構成、教師の選択等、自らの教育に関する一切のことが民衆自身の主体的意志決定においてなされ」たのであり、「自由大学運動の背景には、現在の学校体系が巨額の教育費を使用しながら民衆の知的水準の向上を結果せず、労働と教育の結合は阻害され、教育がブルジョア的教権によっ

て支配されることによって、無産者精神が抑圧されていることへのきびしい批判が貫かれていた」と高く評価した。そして、土田にとって、自由大学運動はプロレットカルト運動の一環をなすものとして意識されており、プロレットカルト論の観点から自由大学運動を検討することが、自由大学運動を評価する際に重要な視点を提供するものと考えられるとし、土田の教育思想を検討したのが、稲葉宏雄「土田杏村の教育思想と自由大学運動」(池田進・本山幸彦編『大正の教育』第一法規、1978年)である。稲葉は、その中で、土田は「学校概念の革命」が必要であるとして、学校体系を成人教育を中心として再編成しようとしたが､その成人教育の具体的実践が自由大学運動に外ならなかったこと、自由大学運動は「生涯を通じての労働と結合した、そして教育における地方主義・自治主義を実現する意図を持った教育運動」であること、しかも「国家が行う民衆教化としての公民教育というブルジョアカルトをきっぱり拒否するものであり、教育内容、方法、講師の選択等、その教育活動の一切が民衆の自己教育への意志によって決定されるという性格をもつべきものであった」こと、教育は一切の教権から独立すべきであって、教育と宣伝とを区別し､「イデオロギー批判の自らの武器を鍛えあげることによって、自らのよって立つ思想的根拠を確立しようとするものであった」ことなどを指摘した。

米山光儀は､「土田杏村の生涯教育論構想」(『日本生涯教育学会年報』第3号、1982年)において、土田の自由大学論とプロレットカルト論を中心に検討し、土田の自由大学論の特色として、(1)「自己教育という教育理論を基底にすえた生涯教育を考えた」こと、(2)「教育と労働との結合」を説いたこと、(3)「教育と宣伝の区別にあらわれている教育の自律性」を主張したことを指摘し、また、プロレットカルト論において、ブルジョアカルトを批判するとともに、現実の教育体制を批判し、生涯にわたる新しい教育制度を構想したもので、それは「学校改革を含めた徹底した生涯教育の構想であった」ことを明らかにしている。

(7) 自由大学運動に関わった人たちへの関心

1970年代の自由大学運動への関心の高まりは、土田杏村以外の講師の人たちへの関心へとひろがり、恒藤恭や山本宣治、タカクラ・テル、今中次麿が自由大学運動にどのように関わったのかという検討が行われるようになった。

山崎時彦は､「上田（信濃）自由大学－その開始」(『法学雑誌』第23巻第4号、1977年)において、上田自由大学の第1期第1回講座の講師となった恒藤恭の「法律哲学」の講義の状況や聴講者との交流を詳細にあとづけている。また、上木敏郎は､「土田杏村と恒藤恭」(『信州白樺』第29号、1978年)の中で、土田杏村と恒藤恭の交流をあとづけ、恒藤の自由大学との関わりについても詳しくふれている。その後、関口安義は、恒藤恭の評伝研究である「評伝恒藤恭(5)」(『都留文科大学研究紀要』第48集、1998年､「評伝恒藤恭」は『都留文科大学研究紀要』第45集、1996年～第54集、2001年、に連載、のち『恒藤恭とその時代』(日本エディタースクール出版部、2002年として出版)の第7章「信濃自由大学」で、恒藤と自由大学との係わりを詳述している。

山野晴雄「山本宣治と自由大学運動」(『信州白樺』第30号、1978年)は、山本宣治が魚沼自由大学や伊那自由大学に出講したときの講義内容や状況、自由大学連盟案の提案などを明らかにし、山宣にとって自由大学運動への関わりは労働者教育運動などさまざまな教育活動への関わりの出発点を意味することを指摘した。また、上木敏郎の「土田杏村と山本宣治」(『成蹊論叢』第16号、1977年)は、13通の往復書簡を中心に2人の交流の足跡とその時代背景を探ったものですが、その中で自由大学運動との関わりが詳しく叙述されている。

山野晴雄「タカクラ・テルと自由大学運動」(自由大学研究会第7回夏季研究例会、1979年9月、日本社会教育学会第26回研究大会、1979年10月)は、講師の中で最も出講回数が多く、人気講師とな

ったタカクラ・テルの自由大学運動との関わりを明らかにしたもので、タカクラは、自由大学を通して地域の青年たちと結びつき、農民運動や青年団運動と関わる中で思想変革をとげていったことを指摘した。

前野良『上田自由大学と今中次麿博士の政治学』（私家版、1983年）及び「回想－上田自由大学と今中政治学－」（『自由大学研究』第8号、1983年）は、上田、群馬、魚沼の各自由大学に出講した今中次麿の講義内容や今中政治学の概要を述べ」たものであるが、その中で魚沼自由大学での「政治学」の講義案草稿「現代政治学上の数問題」を史料紹介している。

(8) 上田自由大学の再構成

多彩な自由大学研究が進められる中で、最も研究が多い上田自由大学についても、新たな自由大学像が提示されるようになった。

山野晴雄は、「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動－上田自由大学を中心として－」（『季刊現代史』第8号、1976年）において、ほぼ10年にわたって学習運動を展開した上田自由大学について、大きく2期に分けて、それぞれの時期の特徴を明らかにしている。すなわち、第1期は1921年に発足してから26年に中断せざるをえなくなるまでの数年間で、土田杏村の大きな影響のもとに地域民衆の「知的欲求の向上と自己成長のための学習運動としての側面がつよかった」時期で、第2期は1928年に再建されてから31年に消滅するまでの数年間で、タカクラ・テルの協力のもとに農民運動と結びつきつつ講座を組織し、「地域変革のための学習運動としての側面をつよめていった」時期であった、と指摘した。

これに対し上條宏之は、「大正デモクラシーと上田自由大学」（『伝統と現代』第56号、1979年、のち同『民衆的近代の軌跡－地域民衆史ノート2－』銀河書房、1981年に再録）において、山野の指摘する昭和恐慌期の「地域変革のための学習運動」段階に形成した文化の前衛性を評価しつつも、「その地域変革学習は治安維持法成立をへた昭和恐慌期特有の非合法性を余儀なくされて、その影響力をきわめてそがれてしまっている」ことを指摘し、上田・小県地域の金井正・山越脩蔵による神川村の生産力調査、農民美術や自由画教育運動、信濃黎明会の普選運動、自由大学の形成など青年たちの動きを検討したうえで、「大正デモクラシー期特有の農民による地域変革運動とのかかわりにおいてすすめられた学習運動と見る」ことができ、「上田自由大学のもつ限界と指摘される地域青年の教養主義・人格主義が、それほど否定的にみられなければならないものなのかどうか、疑問を禁じえない」としている。それは、地域民衆の主体的な営為にそって、その創造性を評価しようとするもので、「教養主義的限界説」に対する新たな問題提起であった。

(9) 松本自由大学

唐澤正平が松本周辺の養蚕・蚕種農家の青年たちと設立した松本自由大学については、『自由大学雑誌』に掲載された彙報や、『信濃日報』などの新聞記事によって５回の講座が知られているだけであったが、松本市教育百年史刊行委員会編『松本市教育百年史』（同会、1978年）が刊行され、松本自由大学の設立から消滅までを要領よくまとめている。ただし、講師名などに誤植がある。その後、有賀義人が『松本平近代100年の軌跡』上巻（銀河書房、1991年）で松本自由大学の歴史を紹介し、松本自由大学が消滅したあと自由大学運動の影響で松本周辺の青年たちが開設した「南信自由大学」と「中信自由大学」について言及している。

(10) 通史等への自由大学運動の登場

自由大学運動については自主的な成人教育活動として注目されたことや社会教育の側から研究が進められてきたこともあり、社会教育分野での通史等への記載は比較的早くから見られた。その後、1970年代からの自由大学研究の進展により、教育史や社会教育の概論や日本近現代史などでも、研究成果をふまえた叙述がなされるようになった。たとえば、小川利夫「自由大学運動」(国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第7巻、1974年)、藤田秀雄『社会教育の歴史と課題』(学苑社、1979年)、吉沢潤『社会教育概論』増補版(国土社、1979年)、島田修一・藤岡貞彦編『社会教育概論』(青木書店、1982年)、川合章・安川寿之輔・森川輝紀・川口幸広『日本現代教育史』(新日本出版社、1984年)、藤田秀雄・大串隆吉『日本社会教育史』(エイデル研究所、1984年)などが、それである。

また、日本近代史の側からも大正デモクラシー運動の1つとして注目されるようになり、通史や講座等で自由大学運動が取りあげられるようになった。たとえば、中野光「教育の自由と解放を求めて」(金原左門編『自由と反動の潮流』日本民衆の歴史第7巻、三省堂、1975年)、鹿野政直「大正デモクラシーの思想と文化」(岩波講座『日本歴史　近代5』第18巻、岩波書店、1975年)、鹿野政直『大正デモクラシー』(日本の歴史第27巻、小学館、1976年)、山野晴雄「教育県長野－上田自由大学とその周辺－」(金原左門編『地方デモクラシーと戦争』地方文化の日本史第9巻、文一総合出版、1978年)、金原左門『昭和への胎動』(昭和の歴史第1巻、小学館、1983年)、山野晴雄・成田龍一「民衆文化とナショナリズム」(『講座日本歴史』第9巻・近代3、東京大学出版会、1985年)などをあげることができる。

(11) 高校日本史教科書への記載

このような1970年代の自由大学研究の成果は、80年代以降になると高校日本史の教科書にも反映されるようになり、自由大学運動が記載されるようになった。『日本史』(改訂版、三省堂、1984年文部省改定検定済)が初出で、その後、『明解日本史Ａ』(三省堂、1994年文部省検定済)、『高校日本史Ｂ』(新訂版、実教出版、1998年文部省検定済)、『日本史Ａ』(東京書籍、2007年文部科学省検定済)で記載された。とくに実教出版の『高校日本史Ｂ』では、「大正期の文化はどのようなものか」という単元で「自由大学運動」をとりあげ、タカクラ・テルの上田自由大学での講義風景の写真とともに11行にわたる説明がなされている(なお、川口自由大学の所在地を埼玉県とする誤りがある)。

３．1980年代以降の自由大学運動研究

(1) 自由大学運動60周年記念集会(1981.10.31～11.1、上田市)

自由大学研究会が主催して開催された記念集会は、1つは、当時の自由大学関係者から出来るだけ具体的に、自由大学運動とは何であったのか、その体験談を語ってもらうことにより、自由大学運動の歴史について、相互の共通理解を深めあう機会にしたいということと、もう1つは、集会のメイン・テーマを「自由大学運動と現代」としたように、自由大学運動と現代との関わりを問うことを意図してもたれたものであった。そこには、自由大学運動における”自由”の問題が、たんに過去の問題ではなく、いま再び実践的課題になっているという認識があった。教科書問題に象徴的に示されているように、国家による教育への介入があらわになっている現在、大正デモクラシーの時期に教育の自由を地域民衆の手にとりもどそうとした自由大学運動の歴史に学ぶことは、すぐれて今日的な意味をもつものと考えたのであった。

集会の第1日目は、山野晴雄が「自由大学運動の歴史とその意義」について講演したあと、タカクラ・テルをはじめ自由大学の講師や受講者を囲み、当時の懐旧談に、参加者たちは熱心に耳を傾けた。その中でも、90歳という高齢にもかかわらず病躯をおして出席されたタカクラは、「私は、自由大学から頼まれて教える役割をしたのですが、実際は自由大学から教わったんです。とくに会員である農民・労働者の人たちから非常に大きな影響をうけました。私のものの見方、人生観というものが、根本的に変わりました」と、その後の人生を決定したのがこの自由大学であった、と語った。また、伊那自由大学の受講者であった佐々木忠綱は、戦時下の村長を経験しましたが、出征兵士に「絶対死ぬな、生きて帰って来いよ」とよびかけ、満蒙開拓の分村を拒否し続けることができたのは、この自由大学で学んだためだと語った。こうした自由大学関係者の証言は、参加者に深い感銘を与えた。

第2日目は、記念講演会として4本の講演が行われた。

上木敏郎は、「土田杏村と自由大学運動」と題して、自由大学運動の中心的指導者であった土田杏村の生涯をあとづけながら、講師としてだけでなく、理論の構築、組織づくり、講師の斡旋など、土田が自由大学運動で果たした役割の大きさを指摘した。

上条宏之は、「自由民権から自由大学へ」と題して、自由大学運動を自由民権期以降の民衆の自発的な運動の系譜の中に位置づけ、この運動が近代日本の歴史の中で、とくに教育・文化の面で重要な問題提起をした運動であることを指摘した。

中野光は、「大正自由教育と自由大学運動」をテーマに、大正デモクラシー期には教育をめぐる「自由」の論議が沸騰したが、その中で土田杏村は「理性的に自己決定できる能力を身につける」という意味での「自由」を追求してきたとし、戦後36年を経た今日、自由を感性の段階でとらえる状況を克服し得ているかと問い、土田の「自由」の理解は、教育の現場で上からの統制が強化されている今日、改めて検討される必要があるとした。

小川利夫は、「自由大学運動と現代社会教育の展望」と題して講演し、社会教育の立場から、自由大学運動の遺産に学び、今日に継承すべき点を明らかにした。小川は、講演の中で、自由大学の基本理念は、今日、多くの地域における住民の運動の出発点になりうるとし、社会教育法第3条のいわゆる「国民の学習権」規定が空文化され抹殺されようとしている今日、自由大学運動にみられる受講資格の撤廃、男女平等の教育、学習教育内容の自主編成などの原則や、現在よりも厳しい条件のもとで持続性をもって学習しようとした点などは、注目すべき経験であり、それを社会教育の場で、ことに公民館で実践することは簡単なことではないが、今後の社会教育の発展の1つの方向を示唆するものであることを指摘した。

このように4本の講演は、総じて教育の自由の今日的意味を問うものとなり、それぞれ示唆に富む内容のものであった。

この記念集会の記録は、のちに自由大学研究会編『自由大学運動と現代』（自由大学運動60周年記念集会報告集、信州白樺社、1983年）としてまとめられたが、それは1970年代の自由大学研究の蓄積を集大成するものでもあった。

金原左門は、「現在に問いかける”自己教育”活動の歴史的経験」（『自由大学研究』第8号、1983年、のち「自由大学をになった青年群像のエートス」と改題・加筆して『地域をなぜ問いつづけるか－近代日本再構成の試み－』中央大学出版部、1987年、に再録）において、60周年記念集会を振り返り、聴講者・講師であった関係者の発言を交えながら、自由大学運動を検討している。そして自由大学運動は、上田・伊那をはじめとしてそれぞれの地域における「大正デモクラシーの時代のすばらしい結晶の一つ」であり、自由大学の推進者たちは、地域において「西田哲学、吉野作造の民本主義、土田杏村の文化論、プロレットカルト的内容をもつ社会主義の影響をそれぞれ受け、それらの諸思想を各人なりに吸収しながら、地域変革、生活改善の方向を模索し、多様性をもって自分たちの成長をはか

ろうとした」とし、しかも第一次世界大戦後の「経済的苦境の矛盾を背負いながら自己教育活動を推し進めたところに、自由大学運動がデモクラシーを日常的な場でアクチュアルに開花させたとみなすこと」ができると評価している。

なお、1982年10月9日と10日には、飯田市立飯田図書館が中心となり、飯田歴史大学・自由大学研究会の共催で「伊那自由大学運動60周年記念集会」が飯田図書館で開催されている。

(2) 〈農村青年〉・受講者への着目

1970年代の自由大学研究は、土田杏村という知識人を中心とした民衆に対する啓蒙運動という図式による自由大学理解を克服し、地域民衆の自己教育運動として自由大学をとらえる視座構造が確立されていったが、80年代から90年代になると、若い世代の研究者が中心となり、自由大学を創出していく〈農村青年〉や自由大学を受講した人々、あるいは地域民衆と知識人との関係性に着目する研究が進められていくようになった。また、金井正・山越脩蔵の文章や諸資料を収録した資料集（大槻宏樹編『金井正選集－大正デモクラシー・ファシズム・戦後民主主義の証言－』大槻ゼミ報告書「社会教育の研究」特別号、早稲田大学教育学部大槻研究室、1983年、大槻宏樹編『山越脩蔵選集－共生・経世・文化の世界－』前野書店、2002年）も刊行され、研究の幅をひろげていくことになった。

柳沢昌一は、「信濃自由大学成立過程の再検討」（『社会教育の研究』（早稲田大学教育学部社会教育専修大槻宏樹ゼミ報告書、第8号、1980年）において、自由大学の構想は、神川村での金井正・山越脩蔵らによる多彩な運動を背景に、直接的には哲学講習会の成功をふまえて、山越が構想したものであり、金井・山越らの運動に深い共感と期待をいだいていた土田杏村の協力を得て、その実現にいたったことを明らかにし、「自由大学運動と〈自己教育〉の思想－〈農村青年〉の自己形成史－」（大槻宏樹編『自己教育論の系譜と構造－近代日本社会教育史－』早稲田大学出版部、1981年）では、神川村における金井正の明治から大正期までの自己形成史を軸に、自由大学を創出するにいたるまでの〈農村青年〉たちの思想と行動を明らかにすることにより、かれらの〈主体性〉の文脈から自由大学の成立をとらえようとするものであった。

また、柳沢は、「「自由大学の理念」の形成とその意義－民衆の自己教育運動における〈相互主体性〉の意識化－」（『東京大学教育学部紀要』第23巻、1984年）において、自由大学運動の動向が土田杏村にどのような影響を与え、土田がそれをどのように思想化していったかという観点から、土田の「自由大学の理念」の形成過程を検討し、自由大学が土田の教育論を育てたことを指摘している。また、「民衆の自己教育運動における知識人と民衆の関連性－自由大学運動の成立をめぐって－」（『日本教育史研究』第3号、1984年）や「自由大学運動における自己教育思想の形成過程」（社会教育基礎理論研究会編『叢書生涯学習－自己教育の思想史』雄松堂、1987年）では、宮坂広作が指摘した教養主義的限界説をのりこえようとする研究に着目して、それまでの研究史を総括したうえで、土田杏村と自由大学運動をになった〈農村青年〉との相互の関係性を明らかにしている。そして、柳沢は、「国家的権威のもと、専門家から民衆へと一方的な伝達の回路と化し、自発性を〈領導〉する装置と化した教育の否定の上に立って、民衆自らが主体性に基づく自己教育運動による、下からの「自由連合」によって働く民衆の〈教育自己教育〉の可能性を切り開こうとした」ことを「自由大学の理念」として積極的に評価し、そのうえで、この「自由大学の理念」そのものが土田という「知識人」と金井正・山越脩蔵ら〈農村青年〉との相互主体的な交流の中から産み出されてきたものであることを明らかにした。

この柳沢の研究を受けて、山越脩蔵ら農村青年と土田杏村との出会いを重視して上田自由大学の概略を叙述したものに、平野勝重「土田杏村と自由大学運動」（『学習指導研修』第4巻第8号、1981年）があり、その後、「上田自由大学物語(1)～(5)」（『懇』第12号、第14号、第16号、第19号～第20号、

1999年～2000年）を著している。また、平野英雄は、「大正期長野県上小地方の青年運動－大正デモクラシーの地域的展開と民衆－日本史教材研究(2)」（『共立女子高等学校紀要』第6号、1985年）において、高校日本史教科書、稲垣泰彦他『日本史』（三省堂）が、自由教育運動や自由大学が「自主的な学習を重んずる教育」「民衆の自立的な文化運動」として叙述されるなど、全体に民衆の生活文化の視点を組みこむ叙述につとめていることをふまえ、「大正デモクラシーの授業展開のための教材研究ノート」として、青年団による「時報」の刊行、信濃黎明会、自由画教育と農民美術運動、上田自由大学について、その概要をまとめている。

一方、60周年記念集会での受講者の証言に触発され、これまでの研究が土田杏村や猪坂直一ら運動のリーダーに着目したものが多かったのに対し、受講者に着目する研究が進められていくようになったのもこの時期の特徴であった。

大槻宏樹は、「自由大学運動－自己と他者の関係性－」（『歴史公論』第83号、1982年）の中で、自由大学を支えた農村青年と民衆に開かれた知識人との関係性をタカクラ・テルを例に明らかにするとともに、上田の金井正が若い頃から戦争や軍備に批判的な眼をもち、戦時下に村長となり苦悩した生涯や、下伊那の佐々木忠綱が自由大学から学んだこととして、戦時下に村長となったとき、満蒙開拓の分村移民を拒否し、出征兵士に「絶対死ぬなよ」という言葉を送ったところに、自由大学運動の「芯」がある、と指摘した。その後、大槻は、「学問の磁気と臨界－福元多世の自由大学と早稲田大学－」（『早稲田大学史紀要』第37号、2005年）で、伊那自由大学を受講した福元多世に着目し、自由大学で、そして早稲田大学で聴講生として学び、「けなげな」存在感を示したことを明らかにした。

米山光儀は、「自由大学の影響に関する一考察－長野県下伊那郡大下条村の場合－」（『慶應義塾大学教職課程センター年報』第2号、1987年）において、伊那自由大学の熱心な受講者であった佐々木忠綱に着目して、自由大学で学んだことがどのような影響を与えたのかを考察し、大下条村の村長となった佐々木が、満蒙開拓の分村移民を拒否しただけでなく、教育や医療が社会では基本的で重要なことと考え、とくに村に中等学校や病院、国民健康保険組合を設立することに努力したことなどを明らかにした（戦後、阿南高校、阿南病院として実現）。それは、自由大学が生み出した1つの人間像を提示するものであった。また、大日方悦夫は、「「満州」分村移民を拒否した村長」（『歴史地理教育』第508号、1993年、のち歴史教育者協議会編『語りつぐ戦中・戦後１　近衛兵反乱セリ』労働旬報社、1995年に再録）で、「満州」移民と「分村」問題に焦点をあてて佐々木忠綱が分村拒否にいたる軌跡を明らかにし、さらに大日方は、その後の資料調査を踏まえ、『満洲分村移民を拒否した村長－佐々木忠綱の生き方と信念－』（信濃毎日新聞社、2018年）をまとめた。

上原民恵は、60周年記念集会に参加したのがきっかけで、昭和恐慌期の上田自由大学を受講した深町広子に関心をいだき、広子の生涯を『深町広子と上田自由大学』（上田小県近現代史研究会、1995年）にまとめている。上原は、この中で、広子がタカクラ・テルと出会い、自由大学に出席したことが、広子の生涯に一筋の道、農民文学の道を歩ませることになったと指摘している。

渡辺典子は、従来の自由大学研究では上田自由大学で学んだ青年たちが地域で果たした役割を明らかにしていないとし、自由大学の存在意義を学んだ民衆の視点から問い直す必要があるとの課題意識から、「1920～30年代における青年の地域活動－長野県神川村「路の会」による学習・教育を中心に－」（『日本教育史研究』第13号、1994年）において、神川村の青年たちの集まり「路の会」の地域活動を検討し、「路の会」のメンバーは神川村の名望家層の息子たちを中心とし、その多くが青年団運動のリーダーであり、上田自由大学の運営者か受講者であったこと、「路の会」が発行した時報『神川』は「村民に現状を直視させ、その認識にもとづく現状打開の方策を提唱」し、対外戦争や政府の恐慌対策の問題性を指摘して、「村の木鐸」としての役割を果たしていたこと、などを明らかにしている。

一方、山口和宏は、自由大学研究会の努力によって数多く集められた受講者の証言に着目し、「実際に自由大学を受講した人々にとって自由大学とは何であったのか？」が考察されないままになっているとし、受講者であった〈農村青年〉たちの声に耳を傾け、自由大学が実際に人々によって担われた意味、いわば「自由大学の生きられた意味」を明らかにして、自由大学運動の「限界」とされてきた「教養主義」を積極的な意義をもつものとして理解しようという意図のもとに、受講者の証言を検討したのが「自由大学運動における「教養主義」再考」(『日本社会教育学会紀要』第30号、1994年)である。山口は、その中で、山野のように昭和恐慌期の自由大学に積極的な意義を見出す自由大学理解は、裏からいえば「教養主義の傾向を回避すること」が出来なかった大正期の自由大学にはそれほど意義を認めないということでもある、と疑問視したうえで、〈農村青年〉にとって最も重要であったのは地域変革よりも自分自身の人生観を確立することにあったと分析し、自由大学が受講生にとっても講師にとっても純粋に「学問」する場、「自我教育」の場として受けとめられ、「真理に飢えたる魂に対して健全なる糧を齎らす可き機関」「真の意味の大学」として実践されたことが、受講生であった〈農村青年〉たちの視野を広げ、「学問する喜び」と「学問の広さ」を知らしめて「本を読む」ようにさせるという〈成果〉をもたらしたとすれば、自由大学運動は前期・後期と時期区分してその「変化」を見るよりも、全体として「教養主義」であったことにこそ意義を見出すべきではないだろうか、と結論づけた。自由大学の教養主義をめぐっては、宮坂広作の教養主義的限界説以来、さまざまな議論がなされてきたが、この山口論文は、土田杏村の視点からの分析ではなく、受講者の立場からの分析であり、自由大学の教養主義をめぐって新たな問題提起をしたものであった。

なお、直接自由大学に関するものではないが、是枝英子は、「草創期の上田市立図書館について」(『図書館学会年報』第33巻第2号、1987年)において、上田自由大学の熱心な聴講者で、1924年に上田市長となった勝俣英吉郎が、不振をかこっていた上田市立図書館に対して、図書館経費の思い切った増額と、25年8月から自由画教育の協力者として知られる岡崎袈裟男を図書館員に登用して、図書館発展への道を開いたことを明らかにしている。

(3) タカクラ・テルの視角から

1980年代に、タカクラ・テルが関わった自由大学運動を、地域変革との直接的な結びつきではなく、教育－自由大学の理念のうち「被教育者本位の教育」と「教育の自律性」－の視点から見直し、タカクラの営為の中に自由大学の未発の可能性をみ、自由大学を発展的に継承するための自由大学像＝「タカクラ自由大学」を構築しようしたのが、米山光儀であった。

米山は、「上田自由大学の理念と現実－タカクラ・テルの教育的営為－」(慶應義塾大学大学院『社会学研究科紀要』第21号、1981年)、「自由大学の発展的継承とは何か－上田自由大学を素材として－」(『自由大学研究』第8号、1983年)、「伊那自由大学とタカクラ・テル」(『慶應義塾大学教職課程センター年報』第1号、1986年)、「タカクラ・テル」(渡辺弘編『「援助」教育の系譜』川島書店、1997年)など一連の論文で、被教育者本位の組織であり、既存の大学とは異なる自由大学では、教育内容も既存の大学と異なっていなくてはならないはずであったが、実際には自由大学に出講した講師の多くは、既存の大学で培われた学問を講義しており、組織として新しい学問を構築するような取り組みをするまでにはいたらなかったこと、そのなかにあって、タカクラは、被教育者がもっている顕在的・潜在的な問題意識にもとづき、既存の大学で学んだ知識を再構築・再編成し、新しい学問を創造していったことを明らかにし、タカクラの教育実践にこそ、自由大学の理念を実現した、あるいは実現する可能性があったことを指摘した。

なお、米山は、「タカクラ・テルの半生－大衆から学んだ知識人－」(山手英学院『紀要』第12号、1982年)で、タカクラの生い立ちから転向した時期までの半生をまとめている。

(4)1990年代の自由大学研究

1990年代に入ると、86年に自由大学研究会が活動を停止したこともあり、自由大学研究は停滞し、見るべき成果はほとんどなくなった。

89年に小川利夫が「ドキュメント社会教育実践史・戦前編Ⅲ　自由大学運動とその周辺」(『月刊社会教育』1989年4月号）で、これまでの研究成果を踏まえつつ、当時の「官製の社会教育には批判的な教育実践や運動を展開すること」に自由大学運動の実践的性格があり、「教育における大正デモクラシー運動のひとつとして、とりわけ、既成の学問や既成の教育のあり方に批判的な青年と若き知識人との出会いにもとづく地域の文化と教育の創造運動として今日なおきわめて貴重な現代的意義をもっている」と指摘した。そして90年代には渡辺典子が、先の『日本教育史研究』論文のほか、「長野県小県郡における学習集団『路の会』について」(『中等教育史研究』第１号、1993年)、「昭和恐慌期における青年層の学習活動」(『日本生涯教育学会年報』第14号、1993年)、「ファシズム体制移行期における青年団運動」(『人間研究』第30号、1994年）の一連の論文を通して神川村の「路の会」の青年たちが、ファシズム移行期にいたるまで時報『神川』を学習の拠点とし「社会に対する批判的な眼を培う」役割を果たしたことを明らかにしている。

また、小林千枝子は、『教育と自治の心性史－農村社会における教育・文化運動の研究－』(藤原書店、1997年）において、同じ農村青年を対象にした自由大学運動と農民自治会の講習会とを比較検討し、自由大学の担い手たちは「自分が受けたくても受けられなかった既存の高等教育に相当するものを、出生地を離れずに受容することを求めた」のに対して、農民自治会を担った青年たちは、同じ長男であっても出生地を離れて農民でない生き方を選んだ者も目立ち、「既存の公教育では看過されるか、そうでなければ特定の価値意識によって抑えこまれていた内言指導を、青年期にある者に対して行った」点に違いがあったことを指摘している。

山口昌男は、『「敗者」の精神史』(岩波書店、1995年）の中で自由大学運動を取りあげている。山口は、「大学で与えられるような教育を地方にいても受けられるという理想は悪くない」と評価しつつも、そこには「近代の大学という直輸入の思想と制度としての学問に対する信仰のようなもの」があり、「生活及び生活文化との繋がりが何処かで切れて]いて、この「運動の持つ根なし草的な性格が、折角の学問の地方化の運動を中途で終わらせ」た、と指摘している。また、上田利男は、夜学の系譜の中に自由大学を位置づけ、『夜学－こころ揺さぶる『学び』の系譜－』(人間の科学社、1998年、増補版1999年）の中で、自由大学は「大学の改造、自己教育運動、働きながら学ぶ教育方式などに挑戦し、各地に大きな影響の足跡を残し」たと、指摘している。

その後、土橋荘司が「土田杏村と信濃自由大学（上）(下)」(『自由』第41巻第10号、第11号、1999年)、「信濃自由大学の終焉」(『自由』第42巻第2号、2000年）を発表しているが、上木敏郎『土田杏村と自由大学運動』を参考にまとめたもので、新鮮味はない。

なお、松本衛二が週刊上田に「上田自由大学とその周辺(1)～(31)」(『週刊上田』1991年9月～1992年3月）を連載していたが、急逝のため中途で終了している。

４．２０００年以降の自由大学運動研究

(1) 土田杏村の思想の再検討

自由大学研究は、2000年代以降になると、70年代から80年代にかけてのような高まりは去っても

のの、土田杏村の思想を再検討する研究が進められていった。

自由大学運動における教養主義の再評価をおこなった山口和宏は、「土田杏村における「教養」の問題－その思想的根底としての華厳の世界観について－」(『日本の教育史学』第36集、1993年）において、土田杏村の「自己教育」の思想と「教養」観の根底には華厳の世界観があり、土田の求めた「教養」はきわめて実践的な性格のものであったが、そうした「教養」の形成を「民衆の自己教育」にまかせようとした「理念」そのものが、民衆にそうした「教養」の形成を実現させないというパラドキシカルな思想構造にあったことを明らかにし、また、「土田杏村のユートピア」(上杉孝實・大庭宣尊編『社会教育の近代』松籟社、1996年）において、土田の「自己教育」と「理想社会」の思想的関連性を検討している。そして博士論文をもとに、土田の思想の全体構造と特色を解明した『土田杏村の近代－文化主義の見果てぬ夢－』(ぺりかん社、2004年）を刊行している。同書は、土田の評論活動がきわめて多方面にわたっているため、各学問分野で「それぞれ個別に論じられるのみであり、杏村思想の全体構造を明らかにした研究は一つも存在しない」という認識のもとにまとめられた労作であるが、自由大学運動については、第4章「教育運動の理論と実践」で取りあげられている。山口は、その中で、自由大学の構想について、自由大学運動は(1)「教育の機会均等」を保障し、知識の独占を排除して〈民衆へ開かれた学問〉を実現しようとするものであったこと、(2)「生涯に亘り永遠に自己教養の機会を持つ」という人間的権利を制度的に保障しようとする運動であったこと、(3)国家の教権から解放され「教育の自治」が保障された自由な教育活動を目指すものとされたこと、(4)自由大学とは「新らしい理想的の聯合体」であり「よき社会的規範」を示すことによって全社会に暗黙裡の影響を与え、しだいに全民衆を教化し、全民衆の社会を理想化する運動であったこと、を指摘したうえで、自由大学運動が失敗に終わらざるをえなかった原因の一つは、土田のかかげる相互主体的な自己教育の理念そのもののうちに胚胎していたことを指摘している。たとえば、自由大学の講師の選択、教育の内容、教育の順序などの教育プログラムは「すべて講師と学ぶものとの協議」によって決定されることになっていたが、この土田のというところの「社会群団的」方法が実現するためには、学ぶ側にあらかじめ相応の知識がなければならないはずであり、「杏村の自治的な自己教育論は、教育された結果をあらかじめ教育の前提とすることで成り立つという論点先取の議論になっており、論理的には成立しないパラドックスなのである」と指摘している。山口は、自由大学が内包していた可能性とその限界の両面を検討し、自由大学運動が挫折していく必然性を土田の思想的文脈において論証したものであり、今後、自由大学を言及する場合には避けて通れない研究成果といえる。

土田杏村の思想研究は、いま一人、古市将樹によって進められてきた。古市は、「土田杏村「社会教育学」に関する研究－人格の論理的成立が示される杏村の「社会」概念－」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』第8号－2、2001年)、「土田杏村「社会教育学」に関する研究－「あるがまま」の社会概念とその提出の理由－」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』第9号－1、2002年)」、「土田杏村の社会教育論にみる教育観の転換の構造」(『日本社会教育学会紀要』第38号、2002年)、「土田杏村のプロレットカルト論に関する研究－教育観のパラダイム－」(『早稲田教育評論』第17巻第1号、2003年)、「土田杏村の教育論および自由大学再考－学習／自己省察の契機としての他者－」(『関東教育学会紀要』第35号、2008年)、「自由大学にみる「教育における他者」問題の実在概念としての他者」(早稲田大学自己教育研究会編『自己教育へのまなざし』成文堂、2010年）と、土田杏村の社会教育論をその背景にある土田の思想との関係から分析する研究を中心に、「教育における他者」の問題を自由大学を事例に検討するなど、意欲的に研究を発表してきた。

博士論文『土田杏村の社会教育学に関する研究－教育観の転換の構造－』(2001年度）は、土田の文化主義・理想主義・人格主義およびプロレットカルトのそれぞれの関係を明らかにし、その総体としての土田の世界観を提示した労作であるが、その第5章で土田の社会教育学の成立過程およびその

意義について論述している。その中で、(1)従来の教育観においては教育を特別な領域としているが、土田は教育を人生や生活の一部として生涯に亘るものとして新たな教育観を提示したこと、(2)土田はポール夫妻のプロレットカルトを導入し、ブルジョアカルトを批判したが、エルガルトクラシー文化を志向しない点でヨーロッパのプロレットカルトとは基本的に異なり、それは土田のプロレットカルトの基盤に、人格主義、文化主義、理想主義がおかれていたことによること、(3)土田は教育概念が社会概念なしには成立し得ないことを指摘し、「教育」は本来「社会教育」と呼ばれるべきであるとし、新たな教育観を提示したこと、(4)その教育は全生涯的であると同時にまた全生活的であること、また教育の自治を得ると同時に教育とそれ以外の生活の部面と緊密に結合すること、その方法は自学的、社会群団的であることや労働と結合すること、などを主張し、土田の社会教育学は、人間が人間らしく生きることの自己教育論を社会教育の中核に据えたものであること、しかも論理的帰結として論じているのではなく、自由大学運動を通した実践の裏づけをもった新たな教育観であったことを指摘したものである。

なお、古市は、「信州にあった生涯学習の先駆け－自由大学運動の概要－」(『愛知文教大学教職センター通信』第1号、2010年）で、自由大学運動を概観したあと、自由大学研究の課題として、(1)受講者にとって、自由大学が幕を下ろさざるをえなかった事実が自由大学の継続と関係してどのように受けとめられていたのかの研究は進んでいないこと、(2)土田の「社会群団的方法」が実際にどのように有効であったのか、なかったのかを含め、土田らの試みに対する受け止め方を加えての自由大学の評価・分析が必要であること、(3)自由大学が開講していた約10年間のことに限らず、その後の時期を含め、自由大学運動が受講者の生き方や考え方にどのような影響を与えたのかを検討する必要があること、などを指摘している。

また、大谷俊「1920年代前半における自己教育論の二潮流－土田杏村の言説分析を中心に－」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第55巻第1分冊、2010年）は、1920年代の自己教育論には、公権力／公教育へのオルタナティブとしての自己教育論の潮流と目的論的自己教育論の潮流があったが、この2つの潮流のいずれの要素も有していたのが土田杏村であるとし、土田の自己教育論を分析している。そして土田のプロレットカルト論には「公権力／公教育」への批判という側面をもっていたが、政策としての社会教育批判は観念的・抽象的なものにとどまっていたこと、また、「人格主義」にもとづく自己教育論は、新カント派の影響を受けながら、教育の目的として自己教育を打ち出し、「人間」は「自律」した「人格」をもつとしているが、自己教育の主体として想定されている「人間」「自己」の実在の概念が判然としていないとする。大谷は、2つの潮流は、どちらも「事物を概念として把握し、演繹的に物事を把握しようとする志向を持つ点で共通」し、その結果、「国家」や「人間」といった生存に関わるタームが抽象的にとらえられ、現実に起きている「国家」や「人間」に対処する視座を欠いている、と指摘している。

土田杏村の文化主義については、清水真木『忘れられた哲学者－土田杏村と文化への問い－』(中公新書、2013年）が、土田の文化主義の意義を検討しているが、自由大学運動についてはほとんど言及されていない。小松隆二『新潟が生んだ七人の思想家たち』(論創社、2016年）は、相馬御風、小川未明、市島謙吉、土田杏村、大杉栄、小林富次郎、本間俊平という新潟県が生んだ7人の先駆者・思想家の業績と評価を紹介したもので、土田杏村については、その生涯と思想を検討する中で、自由大学運動についてふれている。小松は、土田について、「在野にあるだけでなく、つねに市民・民衆の側に立つ自由人であり、思想家であった」とし、自由大学運動については、「日本において最初に大学令や監督官庁の許認可によらない自由大学・市民大学を創設した」もので、学問の自由、つまり「国家・政治から、行政・官公庁から、あるいは既存・既成の大学からも、全く自由な大学」を創設し、「その後の大学・高等教育の日常化・市民化・大衆化の第一歩ともなるものであった」と評価

している。

(2) タカクラ・テルにとっての自由大学

2000年代に入ると土田杏村と並ぶ自由大学運動の指導者となったタカクラ・テルについても、タカクラの評伝研究や、自由大学運動との関わりがその生涯にどのような影響を与えていったのかを検討する研究が出てきている。

山野晴雄は、タカクラの評伝研究を進める作業の一つとして、その幼年・少年時代から学生時代を経て長野県に移住し作家として出発するまでの半生を跡づけた「若き日のタカクラ・テル－作家への道－」(桜華女学院高等学校『研究紀要』第4号、2008年)、1920年代にタカクラがどのように「民衆」を発見し、独自の思想を形成していったのかを跡づけた「タカクラ・テルの1920年代－タカクラにおける「民衆」の発見－」(長野県近代史研究会編『長野県近代民衆史の諸問題』龍鳳書房、2008年)を発表している。山野は、後者の論文で、タカクラが自由大学に出講したのを契機に長野県に移住し、自由大学の農村青年たちや周辺の農民と結びつく中で、文壇からボイコットされ、作家として生きる糧を得ることさえ困難になったが、農村生活に根をおろし、深刻化する農村不況を目の当たりにして、有閑階級としてのインテリゲンチアからの断絶を表明するようになり、活動の重点を自由大学から農民運動に移していったこと、それとともに、自由大学での講義内容も「文学論」から「日本民族史」へと変化させ、そこに「民衆」の発見があったこと、そして農民たちの願いや悲しみを受けとめ、ともに生きぬく中で、タカクラは自己変革をとげていったことを指摘した。

また、「戦時下知識人の思想と行動－タカクラ・テルの場合－」(『法学新報』第109巻第1・2合併号、2002年)は、タカクラが上田・小県地域の農民運動に参画し、1933年の二・四事件で検挙され、「転向」したのちに行った主な仕事である、「標準日本語」の創出を中心とする国語・国字問題、「国民文学」の確立の提唱、農村共同組合の提唱を中心とする農業問題について検討したものであるが、これらの問題は、タカクラが自由大学運動から農民運動に関わる中で培われてきたものであることを指摘している。

一方、大谷俊は、「タカクラ・テルの思想と自由大学運動」(日本社会教育学会第58回研究大会発表資料、2011年、のち「ある作家と教育運動－タカクラ・テルと自由大学運動－」『文藝と批評』第11巻第6号、2012年、にまとめる)において、京都帝大を出ながら、「学問」にまとわりつく、あらゆる「出世」を拒否して、農村の中で、「民族」と「科学」のあり方を問うたタカクラ・テルという一人の知識人の思想転回を、自由大学という社会教育実践との出会いにおいて再検討しようという意欲的な研究を発表している。大谷は、その中で、タカクラの思想は、「帝国大出のある青白いインテリが、「教養主義」とそれの持つニヒリズムを、自由大学という社会教育実践を通じて出会った農村という現実の「問題」に「実践的」に向き合う中で、克服していった軌跡そのものである」とし、したがって、教養主義の議論は、少なくともタカクラにはあてはまらない、と述べ、同時に、タカクラは、「自由大学を通じて、「農村」に出会い、それによって、「共産主義」と出会った。しかし、この「農村」との出会いこそが、彼とファシズムとを結びつけることを可能にした。彼は、「農村」に入ることで、農民や語るべき他者と出会ったが、同時に、ファシズムとも出会った」と指摘している。この大谷の指摘は、昭和恐慌期にタカクラが自由大学運動から農民運動に重点を移し、上小農民組合連合会や西塩田村小作争議を指導した問題には触れてはいないものの、タカクラがなぜ「転向」をしたのかという問題に検討をせまるもので、自由大学研究にも大きな問題提起をしているものとなっている。

渋江かさねは、「地域における成人学習の歴史的出自」(『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第20号、2012年)において、日本の地域における成人学習の歴史的出自を、自由大学運

動に着目して探究しようとしたもので、自由大学の講師と受講者との相互主体的な学びを、タカクラ・テルを軸にして明らかにし、知識人と地域民衆の間での学びあいや教えあいは、タカクラにあっては、自己の生き方に悩み苦しむ思索を聞いてくれる聴講者、自由大学会員の存在があったこと、また、タカクラが上田に居を構え地元民となる中で、学問を求める「飢えたる魂」を持つ同志として、受講者とともに成長・発展することを志向するようになったことを指摘している。

(3)自由大学とその影響

小平千文は、上田自由大学の設立の経過と活動の様子、そして昭和初期と戦後の再建の動きまでをまとめた「あらためて上田自由大学をみつめる」(小平千文・中野光・村山隆『上田自由大学と地域の青年たち』上田小県近現代史研究会ブックレット11、2004年）を発表した。その中で、戦後の上田自由大学の再建の動きを紹介し、講座一覧を明らかにした。また、長野県史の史料調査で明らかになった県内の、自由大学運動の影響を受けて作られた「自由大学」を紹介している。小平は、すでに「自由大学関係史料紹介」(『上田近代史だより』第25号、1985年）で、さらに「60周年から90周年に至る間の長野県内における自由大学関係史料」(大槻宏樹・長島伸一・村田晶子編『自由大学運動の遺産と継承－90周年記念集会の報告－』前野書店、2012年）で、土田杏村やタカクラ・テル、上田自由大学のネットワークの中で設立されていった自由大学とは異なる、地域の青年会などによって設立された上伊那南部自由大学（上伊那郡)、中部自由大学（上伊那郡)、南信自由大学（東筑摩郡)、自由大学講座（上高井郡)、東北自治学会（小県郡神科村)、川西文化大学（小県郡中塩田村)、自由大学講座（埴科郡)、松原自由大学（南佐久郡)、佐久自由大学（南佐久郡）の史料を紹介しているが、自由大学運動に触発され、あるいは影響を受けて地域の青年たちが設立した「自由大学」をどのように評価すべきかは、今後の検討課題となっている。また、小平が「農村教育研究会と信濃農村自由大学－その設立と思想－」(『長野県歴史館研究紀要』第1号、1995年）で本格的に検討した更級地方の信濃農村自由大学や、上高井地方の青年会が設立した冬期自由大学など、農本主義的な「自由大学」との相違点なども明らかにしていく必要がある。

(4) 長野大学総合科目「上田自由大学とその周辺」

長野大学は、2005（平成17）年度、総合科目「上田自由大学とその周辺」を開講し、自由大学研究に関わった研究者が講師として招かれ、その講義録が長野大学編『上田自由大学とその周辺』(郷土出版社、2006年）としてまとめられた。同書には、山野晴雄「自由大学運動の歴史」、小平千文「上田自由大学を創設し運営した青年たち－金井正・山越脩蔵・猪坂直一－」、米山光儀「タカクラ・テルと自由大学」、 黒沢惟昭「自由大学と『教養の問題』」、長島伸一「自由大学運動と聴講生の学びの実態」、上原民恵「深町広子と上田自由大学」、中野光「大正自由教育と自由大学運動」の7本の論文と、資料として、山越脩蔵の「信濃自由大学（未定稿)」、長島伸一編「自由大学関係文献目録」が収録されている。

多くの論文は、これまでに発表した論文をもとにしながら新しく書き下ろされたものであるが、近年の研究成果も取りいれられているものもあり、同書によって、自由大学研究の現在をある程度知ることが出来るものとなっている。

その中で、長島伸一の「自由大学運動と聴講生の学びの実態」(のち「自由大学運動の歴史的意義とその限界」(『経済志林』第74巻第1・2号、2006年、と改題・加筆して収録）は、「可能な限り過去40年以上にわたる自由大学研究の蓄積を踏まえ、併せて比較的最近の動向にも留意しながら」、自由大学をめぐる論点を整理し、自由大学運動の歴史的意義とその限界を明らかにしている。長島は、そ

の中で、(1)自由大学運動の歴史的意義として、「自由大学は、個人主義的な立身出世主義とも実利主義とも無縁な、社会性を背後にもった自己教育機関」であり、特定の学説や思想を「批判的に吟味して自己判断を下しうる「自律的人格」を養成する機関」であったがゆえに、「佐々木忠綱のような、いわば〈地域を変えうる教養人〉とも呼びうるような人物の輩出も可能であり、そこに計り知れない社会的意義があった」こと、(2)自由大学はいかなる学説や思想をも「排斥」したり「拒否」したりはせず、「各自の批判的な吟味、真理を追求するプロセスが大事と考えたのであり」、それは自由大学の「限界」どころか、「むしろクリティカル・シンキングを要請する自由大学の優れた点である」と評価したこと、しかし、(3)自由大学の限界として、これまで「自学的」「自治的」という自由大学の原則ないし特徴は肯定的に評価されてきたが、疑問であるとし、自由大学の実態に照らしてみた場合、講師が日常的に教育支援のできる体制にはなっていなかったことや高等教育への準備教育（導入教育）が周到に用意されていなかったこと、「被教育者本位」の自治への配慮も不徹底であったことなどをあげて、「理念と実態とが乖離していた点を無視ないし軽視するすることは、自由大学運動の歴史的意義を正確に把握する途ではない」ことを指摘している。

長島の指摘は、近年の研究成果をふまえつつ、自由大学運動のもつ意義と限界を明らかにしたものであり、今後、さらに検討を進めていくべき課題を提示している。

(5)受講者の軌跡

長島伸一は、その後、上田自由大学に関わった受講者を中心に、自由大学が開講していた約10年間のことに限らず、その後の時期を含め、自由大学運動が受講者の生き方や考え方にどのような影響を与えたのかを検討し、一連の論文を発表している。

「上田小県地域の青年団運動と「社会的教養」－『西塩田時報』を中心に－」(『長野大学紀要』第30巻第2号、2008年）は、「信濃黎明会記事録」「信濃自由大学会計簿」「自由大学雑誌発送簿」「上田自由大学会計簿」の4つの史料と、上田小県地域で発行された「時報」の編集者・執筆者と青年団役員とを重ね合わせることにより、自由大学の世話人や受講者と信濃黎明会の会員、青年団の役員、「時報」の編集者・執筆者とが重なり合うことを明らかにし、小県郡連合青年団幹部講習会の内容や『西塩田時報』での言論を分析し、地域の青年団活動の中で、個人の枠を超えた集団・組織的な「社会的教養」がどのように生み出され、どのような水準を創り出していたのかを明らかにした（なお、長島伸一「自由大学と上田小県地域の青年団運動－「社会的教養」をめぐって－」『長野大学紀要』特別号第1号、2009年、も参照)。

「上田自由大学の受講者群像（1）－宮下周、堀込義雄の軌跡－」(『長野大学紀要』第33巻第2・3合併号、2012年）は、自由大学の聴講者で、小県郡連合青年団副団長であった宮下周と堀込義雄という対照的な2人の軌跡を描いたもので、宮下は「自立更生の精神」を説くようになり、村長となった浦里村を更正模範村とし、ファシズムを地方で下支えする役割を果たしていったこと、それに対し堀込は、神川小教員時代に自由大学を受講し、柔軟でバランスのよい思考様式を身につけ、戦後、神川村長の時代には菅平硫黄採掘反対運動の先頭に立ち、神川の水源を守ったことなど、その思想と行動を明らかにしている。

「上田自由大学受講者群像（2）－山浦国久、石井泉の軌跡－」(前掲『自由大学運動の遺産と継承－90周年記念集会の報告－』) では、公民学校・青年学校教員から県の社会教育主事補・社会事業主事となり、大政翼賛運動に関わり、戦後公職追放となった山浦国久と、青年会活動からファシズム期には「転向」を余儀なくされ、戦後は泉田村長、上田市長と地方自治と地域の生活・文化の向上に努めた石井泉の思想と行動を追っている。

また、「金井正の思想と行動（1）－大正デモクラシー期を中心に－」(『長野大学紀要』第34巻第2

号、2012年）、「金井正の思想と行動（2）－ファシズム期を中心に（第1部）－」（『長野大学紀要』第35巻第2号、2013年）、「金井正の思想と行動（3）－ファシズム期を中心に（第2部）－」（『長野大学紀要』第35巻第3号、2014年）では、上田自由大学を創設し、地域の「社会的教養」の涵養に尽力した金井正の思想と行動をあとづけ、在野の哲学者としての側面、社会教育や学校教育に歯に衣着せぬ立場を貫いた教育思想家の側面、農民美術運動に孤軍奮闘した実践家の側面、神川村長在任中のファシズム全盛期にそれを批判する私的メモを残したリベラリストの側面、戦後の日本社会を冷静な眼で観察した民主主義者としての側面を明らかにした。

これまでの研究では、上田自由大学、信濃黎明会、「時報」の3つの研究が、その関連をとわれないままに、それぞれ個別研究として行われてきた。長島は、この三者の密接な関連を踏まえつつ、上田自由大学のような教育運動の歴史的評価を確定しようとする場合には、その受講者たちがその後どのように学びの成果を深め、地域社会の改革への貢献を果たしたのかを跡づける必要があるとの課題意識から、自由大学受講者の「時報」記事などを検討し、受講者の軌跡を描いたものであった。長島の一連の研究は、自由大学研究を深化させた貴重な成果といえる。

（6）自由大学運動90周年記念集会

2011年11月5日、大槻宏樹が発起人代表となり、長野大学において自由大学運動90周年記念集会が開催された。1981年に60周年記念集会が開かれて以来、30年ぶりの研究集会であった。

プログラムは、大槻宏樹の「趣旨説明」のあと、山野晴雄「自由大学運動の90年－自由大学研究史を回顧して－」、大谷俊「80年代生まれからみる自由大学－「自由」と「大学」の現在的課題－」、古市将樹「自由大学と土田杏村－他者との出会い－」、「関係者を囲んで」山越さち・深町稔、長島伸一「小県郡連合青年団役員と上田自由大学受講者－宮下周、堀込義雄、中島忠次、石井泉の軌跡－」、柳沢昌一「自由大学運動における〈自由〉の再考」の報告があった。

記念集会の記録は、大槻宏樹・長島伸一・村田晶子編『自由大学運動の遺産と継承－90周年記念集会の報告－』（前野書店、2012年）としてまとめられ、報告は、記念集会の時のテーマとは異なるものもあるが、山野晴雄「自由大学運動の90年－自由大学研究史を回顧して－」、大谷俊「土田杏村における「もう一つの学問」の模索と展開－「もう一つの大学」としての自由大学の自律性への問い－」、古市将樹「自由大学運動におけるもうひとつの「他者」－学びの欲望を体現する「他者」－」、長島伸一「上田自由大学受講者群像（2）－山浦国久、石井泉の軌跡－」、柳沢昌一「自由と大学をめぐる歴史的な省察－「自由大学の理念」の再考」としてまとめられ、また、資料として、深町稔「関係者を囲んで　深町（三井）広子の話」、〈土田杏村から山越修蔵への書簡〉、小平千文「60周年から90周年に至る間の長野県内における自由大学関係史料」、論文集として、清水迪夫「胡桃澤盛と山本宣治－『胡桃澤日記』から－」、伊藤友久「小林多喜二と自由大学－プロレタリア作家が出会った自由大学関係者－」、村山隆「土着住民の「自由大学」覚書きメモ」、井上恵子「地域と大正期の自由大学－「学び合うコミュニティ」への一私論－」、渡辺典子、米山光儀の参加記などが収録されている。

このうち大谷の報告は、土田杏村の「学問」とその意味について検討し、土田の「学問」は、「統一された原理」に裏付けられた「総合的な立場」ら「世界」（分野）を説明しようとする新しい「総合的」な「学問」であったが、権力関係から関係性を捉える視座が希薄であるという欠点があったこと、土田には大学と学問の「自律性」が「誰のためのものなのか」、その固有性や必要性を明らかにすることができなかったことの問題点を指摘したものであった。

古市の報告は、土田杏村における「他者」の問題を検討し、〈教育〉によって学ぶ者へ形成する「他者」のほかに、「他者」によってわれわれが学ぶものになる〈生成する〉ケースに見られる、もう一

つの「他者」があることを指摘したものであった。

柳沢の報告は、「大学の理念」としての自由に関わるヤスパースとカントの思想を検討した上で、土田杏村の自由大学の理念を再考し、その到達点における〈市民の生涯にわたる自由な学習のコミュニティ〉を核とする教育組織全体の改革構想を跡づけ、地域において実践者が実践を重ねつつ実践をより深く省察し探求するコミュニティ（「実践し省察するコミュニティ」）としての大学を目指す福井大学における実践を、自由大学を引き継ぐものとして紹介したものである（のち、「自由大学をめぐる歴史的な省察－「自由大学の理念」の再考－」『教師教育研究』第7号、2014年、に採録）。

(7)『自由大学雑誌』の検討

上田自由大学に始まる自由大学運動が全国各地に拡大していく中で、各地の自由大学の連絡組織として自由大学協会が設立され、機関誌『自由大学雑誌』が刊行された。この『自由大学雑誌』については、これまで掲載されている論文や回想、彙報記事などは史料として引用されてきたが、11冊全体の分析はされてこなかった。

中嶌洋は、「学習メディアとしての『自由大学雑誌』の役割－雑誌の構成及び掲載論文・記事の分析から－」（『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』第4号、2010年）において、『自由大学雑誌』掲載の論文や記事を分析し、この機関誌の意義や役割について、「講師と読者の相互交流を可能にし、自己学習の具体策を準備するものとして位置づけられ」ていたこと、情報交流により関係者や学習者の意識の結集に寄与し、「教育の民主化の原理が具体的に探究されていた」こと、「誌上に散見される課題や自由大学教育に対する批判の丁寧な捉え直しが学習者のみならず、編輯者や関係者にとっても自己教育の鍛錬の場になっていた」ことを指摘し、自由大学運動の展開には、「機関誌の発行を介して主体的な自己学習への転化の可能性を創出し、受講生と講師との間の双方向の学びという形で具体的に提示されており、短期間ながらその具体的事例が『自由大学雑誌』の刊行及びその構成・編集のなかで先駆的に試みられていたことは注目に値する」と評価した。

『自由大学雑誌』については、「発送簿」をもとに購読者の全国的な分布は明らかにされてきたが、中嶌論文は自由大学運動における機関誌の役割を明らかにした点で、自由大学研究に新しい視点を提供するものであった。

(8) 伊那自由大学研究の新たな動き

2000年代に入ると伊那自由大学に関する新たな資料が発掘され、伊那自由大学の運営の状況や、自由大学と社会主義青年運動との関係などについて、伊藤友久、清水迪夫が研究を発展させた。

伊藤は、伊那自由大学の発起人の一人である須山賢逸のもとに残されていた書簡と既出の史料をもとに、須山が関わった自由大学、下伊那郡青の動きを再構成した。

「須山賢逸の関連史料－信南自由大学発起人と画家石井柏亭との接点－」（『信濃』第53巻第2号、2001年）では、須山の弟で画家の須山計一を介して接点を持った石井柏亭の、46年1月に賢逸が死去したときのお悔やみ状が紹介されているが、自由大学の発起人となった須山賢逸とその家族の状況が明らかにされている。「須山賢逸の関連史料（2）－信南自由大学の創立と理念－」（『信濃』第53巻第9号、2001年）では、須山宛の山本宣治書簡と電報を紹介しており、自由大学開講直前の状況がより詳細に明らかになった。「須山賢逸の関連史料（3）－郡青から信南自由大学へ、そして信濃自由大学との係わり－」（『信濃』第55巻第7号、2003年）では、須山が下伊那郡青委員長時代に郡青や鼎村青主催の講演会に講師として招請した永井柳太郎と藤森成吉の葉書を紹介し、当時の地域青年の動向や須山が自由大学を創立させた背景を明らかにし、自由大学は、青年会の自主化の動きの中にあっ

て、「民衆による自由教育機関の創立は必要不可欠との認識に至ったから」であり、来たるべき普通選挙実施に備え、特に新たな有権者、すなわち労働者階級や農民層が時勢に左右されず、自身の考えのもと判断を下せるように、「精神能力と教養」を青年期から備える必要性を感じていたからであると指摘している。

また、「山本宣治から小林多喜二へ－二人のプロレタリア運動家をつなぐある兄弟の人物史－」(『信濃』第61巻第10号、2009年)、「小林多喜二と自由大学－プロレタリア作家が出会った-自由大学関係者－」（前掲『自由大学運動の遺産と継承－90周年記念集会の報告－』）では、兄の須山賢逸が伊那自由大学創設者の一人として関わり、山本宣治との折衝に当たり、山宣から多大な影響を受けたこと、弟の須山計一は漫画家及び画家として幅広い活動を通し、プロレタリア作家の小林多喜二と交流するようになり、『蟹工船』の装幀を担当したこと、など須山兄弟の足跡を跡づけている。

清水は、『南信新聞』記事の再発掘、自由大学受講者でのち河野村長となり、戦後、「満州」移民問題の責任をとって自死したといわれる胡桃澤盛の日記『胡桃澤盛日記』（全6巻、「胡桃澤盛日記」刊行会、2011～2013年)、自由大学関係者、自由青年連盟関係者などの回想などをもとに、伊那自由大学と山本宣治の関係、自由青年連盟や政治研究会下伊那支部など社会主義青年運動と自由大学との関係などについて、一連の論文で、再検討を行っている。

「山本宣治と下伊那の青年たち」(『伊那』第55巻第10号、2007年）では、山本宣治が伊那を来訪した、1924年1月の伊那自由大学、25年月の郡青主催講演会、27年11月の郡青主催の巡回講演会の3回の状況を検討し、特に伊那自由大学の場合は、須山賢逸が折衝に当たり、山宣は「人生生物学」を講義したこと、自由青年連盟からの受講者は9名と少なかったこと、しかしこのあと山宣と下伊那の青年たちとの関係は深まっていったことを明らかにした。

「伊那自由大学と『南信新聞』」(『伊那』第56巻第10号、2008年）は、山野が「資料紹介『南信新聞』伊那自由大学関係記事」(『自由大学研究』第5号、1978年）で紹介した『南信新聞』の伊那自由大学に関する記事37のほかに20の記事を新たに発掘、解説を加えたもので、政友会系の『南信新聞』は伊那自由大学の設立に期待し、設立当初は講義の内容も詳しく報道していたが、活動が衰えると記事の内容も開講の案内だけになり、自由大学に対する期待と熱意も薄くなっていったことを明らかにしている。

「大正期における下伊那の青年運動と読書－『胡桃澤盛日記』より－」(『飯田歴史研究所年報』第9号、2011年）は、下伊那郡河野村の「改革型サブ・リーダー」であった胡桃澤盛の日記をもとに、どのような読書をし、講演を聴きながら、思想的成長をとげていったのかを検証したものである。清水は、下伊那の青年運動の盛衰と胡桃澤の読書は無関係ではなく、伊那自由大学に聴講するとともに読書の幅も量が増えていったが、郡青の運動が退潮する中で、社会主義思想への共感から国家主義へ揺れていることを明らかにした。

「胡桃澤盛と山本宣治－『胡桃澤盛日記』から－」（前掲『自由大学運動の遺産と継承－90周年記念集会の報告－』）では、胡桃澤の日記をもとに、信南自由大学が設立され、山本宣治やタカクラ・テルの講座を聴講した様子を明らかにし、胡桃澤は自由大学に期待し、受講を機に、山宣との文通が始まり、タカクラの勧めによりドストエフスキーからトルストイへと読書の幅もさらに広がっていったが、しだいに彼の関心は自由大学から政治研究会下伊那支部に移り、「自由大学雑誌」を購読し、自由大学からも来信があったにもかかわらず、自由大学から離れていっていったことを明らかにした。

「下伊那の青年たちが招いた講師－大正後期から昭和初期（1）（2）（3）－」(『伊那』第60巻第11号、2012年、第61巻第2号、2013年、第61巻第12号、2013年）は、1920年代に下伊那郡青年会、自由青年連盟、伊那自由大学、政治研究会下伊那支部など下伊那の青年たちが招いた講師、合計72名の行動歴の概要や演題をまとめたものである。

「伊那自由大学と下伊那の青年たち（1）（2）」（『伊那』第62巻第11号、2014年、第63巻第3号、2015年）は、伊那自由大学に対する自由青年連盟や政治研究会下伊那支部など社会主義青年運動の側の反応について検討し、自由青年連盟にも北原亀二に代表される懐疑・反感派と、羽生三七に代表される理解・傍観派があり、自由大学を受講した連盟会員は少なかったこと、また、ＬＹＬ事件後自由大学が青年運動と無関係とするパンフレットを出したことに対して、政治研究会下伊那支部の機関誌『政治と青年』は、発行兼編集印刷人が北原亀二に代わったこともあり、それを厳しく批判する論調の記事を載せるなど、社会主義的青年たちの反応には、懐疑、拒否の反応が強かったとし、長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編『下伊那青年運動史』（国土社、1960年）の自由「大学が青年に与えた影響も大きく、これによせる青年の信頼も強かった」という評価に疑問を示した。

「伊那自由大学受講生の社会階層」（『飯田市歴史研究所年報』第15号、2017年）は、伊那自由大学を受講したことが判明している41名の学歴、運動歴、職業などについてアンケートや聞き取り調査によって明らかにしたもので、自由大学受講者は、そのほとんどが下伊那地域の町村ないし下伊那郡の青年運動のリーダー的立場にある活動をしていること、また、上田自由大学の受講者と同様に、一定の「経済的資力」を持つ「有資産者」層の青年たちであることを明らかにした。

なお、田中雅孝は、「戦間期・農村指導者の主体形成－長野県下伊那郡河野村・胡桃澤盛の事例－」（上條宏之監修・長野県近代史研究会編『長野県近現代史論集』龍鳳書房、2020年）において、伊那自由大学を受講した胡桃澤盛が戦間期にどのような社会意識を持ち、変容していったのかを跡づけている。また、手塚孝典は、『幻の村－哀史・満蒙開拓－』（早稲田新書、2021年）において、信南自由大学を聴講し、自由主義の風に触れながら、戦時下の村長として満蒙開拓を推進し、戦後、その責任をとって自死した胡桃澤盛の軌跡を追っている。

伊那自由大学の受講者については、『胡桃澤盛日記』の刊行によって胡桃澤の生涯があきらかになってきたが、胡桃澤以外では、栗谷真寿美が「農業青年・楯操の歩み－自由大学の回想より－」（『信大史学』第44号、2019年）で、千代村から自由大学を熱心に聴講した楯操の生涯を追っている。栗谷は、楯が千代小学校時代に自由教育を実践した三石直人が担任となりその影響を受けたこと、青年会の活動に参加、自由大学ではタカクラ・テルらの教えを熱心に講義ノートに取り、その後、江渡狄嶺と出会い、戦後、狄嶺の農業共同体構想の影響からヤマギシズムを結びつけ、ヤマギシ会に入会、飯田実顕地を開いたことを跡づけている。

また、直接自由大学を扱ったものではないが、小黒浩司「『優良図書館』の誕生－長野県下伊那郡千代村立千代図書館の歴史－」（『図書館界』第55巻第5号、2003年）において、千代青年会の青年たちが、青年会の自主化運動を進め、1924年の村立図書館の設立では図書館の自主運営権を確立し、27年には伊那自由大学千代村支部を設立したことに触れている。

(9) 八海自由大学研究の新たな動き

新潟県の自由大学運動については、1970年代から80年代にかけて、森山茂樹、山野晴雄、佐藤泰治、安達朋子が論文を発表して以降、研究の進展がなかったが、2018年に芳井研一が「八海自由大学と地域文化水脈」（『佐渡・越後文化交流史研究』第18号、2018年）を発表し、八海自由大学について再検討するとともに、南魚沼地域には小学校教員による新教育の取り組み、とりわけ桑原亮太郎による童謡や演劇教育の実践、郡下の俳句ネットワークなど、この地域には自由教育と創作の風土が広く存在し、自由大学の文化水脈が土壌として流れていたことを明らかにした。

なお、川上尚恵は、「日中戦争期における中国の少年達の日本留学」（『新世紀人文学論究』第2号、2018年）において、八海自由大学の中心であった渡辺泰亮が、日中戦争期に明治学寮で中国留学生に行った日本語教育の実践を分析している。

（10）自由大学運動研究の現在

1990年代に停滞した自由大学研究は、2000年代に入り山口和宏、古市将樹、大谷俊ら若い研究者による土田杏村の自由大学の理念や教育思想の分析、長島伸一による受講者の軌跡を解明する作業、清水迪夫による伊那自由大学と地域の青年たちとの関係など、新たな研究の進展が見られた。

こうした中で現在、自由大学に関する最新の研究としては、1920年代に青年たちが青年としての自立と自己実現を求めて起こした運動の一つとして自由大学運動を取り上げ、その歴史的意義を、運動の担い手であった青年の側から明らかにしようとした田嶋一「1920年代における青年たちの自立への希求と自由大学運動」（『國學院大學教育学研究室紀要』第51号、2016年）がある。田嶋は、青年の自立と教育文化の視点からすると、自由大学運動は、「主に生活のゆとりのある階層の青年たち（A層）が人格の向上をめざして人文科学を中心に学習に取り組み、文化主義的な自己形成運動としての性格が強く現れていた前期の運動と、主に生活のより困難な地域・階層に属する青年たち（B層）が、社会主義運動の影響をうけながら社会科学を中心に学習に取り組み、自己形成と社会変革が結びついて展開することになった後期の運動に大きく性格が分かれる。前期の学習運動には、文化の学習によって個人の近代的自我の確立と内面的自立を図ろうとする傾向が強く、後期の運動には、地域社会の変革と自己形成を重ねて学習運動が展開される傾向が強く現れていた」とする。そして「養蚕・蚕糸業の発展を背景とする農村青年たちの近代人としての自我の形成と自己実現への欲求、自由と自治、自立と自律への熱望、学問へのあこがれなどを受けて、地域社会の自生的な学習機関をつくりだそうとした土田たちの教育実践は、日本の教育史上画期的な試みであった」が、「真の修養」を求める農村青年たちにふさわしい教養のあり方の問題が十分に課題化される前に、自由大学運動は消滅した、と評価した。この田嶋の論文は、その後、加筆され、「近代日本の青年の自立と教育文化(2)－1920年代における青年たちの自立への希求と自由大学運動－」として「青年の自立と教育文化」研究会『青年の自立と教育文化』（野間教育研究所紀要第61集、野間教育研究所、2019年）に収録されている。

田中幸世は、「自由大学運動と現代」（中村浩爾・桐山孝信・山本健慈編『社会変革と社会科学－時代と対峙する思想と実践－』昭和堂、2017年）において、自由大学運動を「時代に立ち向かった民衆の自己教育運動」であるとし、先行論文に依拠しつつ、自由大学の理念と実態を検討したうえで、自由大学の精神は、「教養」と「自己形成」の問題で、また教権からの自由の問題で、現代に重要な問題を提起し続けている、と述べ、自由大学が追求した「教養」と「自律的人格の形成」は、自己実現と社会変革の相互媒介的な過程として、現在も有効であるとし、また、国家と資本による教権の支配が激しくなり、日本の高等教育が危機的状況にある現在、「大学とは何か」を問い、「新しい大学像」を求めた自由大学が提起した問題は、今も鋭い問いを突きつけていると指摘している。田中は、先行研究を踏まえつつ、自由大学運動の現代的意義を指摘したものであった。

上田自由大学が創設されてから100年目の2021年、伊藤友久は「自由大学運動の起因と崇高な理念－生涯学習発祥の地としての責務－」（『長野県立歴史館研究紀要』第27号、1921年）を発表し、先に発表した「須山賢逸の関連史料－信南自由大学発起人と画家石井柏亭との接点－」（『信濃』第53巻第2号、2001年)、「須山賢逸の関連史料（2）－信南自由大学の創立と理念－」（『信濃』第53巻第9号、2001年）及び「須山賢逸の関連史料（3）－郡青から信南自由大学へ、そして信濃自由大学との係わり－」（『信濃』第55巻第7号、2003年）を再構成して、上田自由大学と伊那自由大学の趣意書とその創設に深く関わりをもった当事者の視点から、それぞれの自由大学の創設当時の状況と理念を論じようとしたものである。とくに伊那自由大学については、「プロレットカルトを骨子とした民衆自身の教育機関として創立することで、信濃自由大学との違いを意識した」こと、しかも自由大学を

政治的運動とはあくまで切り離して考え、自己が時勢に流されることなく判断できる「精神能力と教養」の基礎を身につけることを目的としていたことを指摘している。だが、「自由大学の崇高な理念」とは具体的にはどのようなものなのか、伊藤の解釈は明確に示されていない。また、この伊藤論文には、すでに約20年前の論文での新出史料を再び新出史料として紹介したり、史実の誤り、出典が明記されていない、小平千文論文に対する不当な評価（自由大学は「官に組(ママ)することを拒否する思想や組織原則をもっていた」という小平論文の指摘に対して、「不名誉な烙印」を自由大学に押した、と評価している）などいくつか問題があることを指摘しておく。

岡本洋之は、「土田杏村の彼方に青年たちが見た『学問的自己教育の文化』－英日比較教育史のなかの自由大学運動と長野県千代村の人々－」（『日英教育研究フォーラム』第25号、2021年）において、英日比較教育史研究の方法から土田杏村の自由大学の理念と教育方法について、なぜ英国の教養教育機関から直接に学ぼうとしなかったのか、を分析し、英国で「学問的自己教育の文化」（autodidact culture）を担った代表的組織はWEA（The Workers' Educational Association, 労働者教育協会）であったが、「土田は、日本で教養教育機関たる自由大学の充実を期したにも拘らず、WEAに言及せず、WEAを批判したポール夫妻への批判を通じ、夫妻とは異なるプロレットカルト論を展開した」と指摘している。そして土田は、1918年版WEA年報を手にしながら、自分が共感する、教育と政治理論宣伝の峻別を説くコールの論稿は読んでも、講義をもとに討論や小論文を作成する学問的自己教育の重要性を指摘したビートンやスケルトンの論稿など自由大学を運営するうえでの重要な論稿からは学び取ることをしなかったが、それは土田に「民衆へのリスペクトが弱く、彼が受講者から能力を引き出す方法に強い関心をもたなかった」からであると指摘し、それに対して伊那自由大学千代村支部を創設した青年たちは、受講者の学問的自己教育を志向し、土田という「指導者を超え自力で、英国流学問的自己教育の文化を具体化する一歩手前にまで迫った」と評価している。岡本論文は、これまでの土田杏村の自由大学理念を検討する際に、そのプロレットカルト論に関連してポール夫妻の名前に言及はしても、ポール夫妻のプロレットカルトの問題点を分析したものはなく、英日比較教育史研究という視点から自由大学運動研究に一石を投じた貴重な成果といえよう。

2022年に入り、佐々木七美は、(1)地域社会における〈修養主義〉／〈教養主義〉の浸透と自由大学運動への影響について考える、(2)自由大学における講師陣の講義内容と生徒側の受容について考える、(3)普選運動及び自由大学運動から浮き上がる農村「青年」の実態について考察する、(4)「学校制度」のもとの「教育」について捉え直す、という4点について明らかにすることを意図して、「農村『青年』の〈実像〉－大正デモクラシー期、信濃地域における、普選運動及び自由大学運動を中心に－」（『学習院女子大学紀要』第24号、2022年）を発表した。しかし、この佐々木論文は、基本史料としたのが猪坂直一の『枯れた二枝』であり、信濃黎明会を上田自由大学の前身と位置づけたり、地域社会おける〈修養〉／〈教養〉の受容のあり方にしても「時報」や講義内容の分析がなく、信濃黎明会の普選運動にしても先行研究をふまえておらず、自由大学における講師陣の講義内容や生徒側の受容についても中沢鎌太らの筆記ノートや日記などの検討もないなど、史料収集や分析が不十分なのは否めない。ただ佐々木が、これまでの研究が、自由大学を〈農村「青年」〉と〈都市の新進気鋭の学者〉という二項対立によって論じられてきたのに対し、農村「青年」をリーダー格／運営者側である農村「青年」と受講生／受容側である農村「青年」とに分けるべきだとし、中央の学問を摂取しようしたリーダー格の農村「青年」、講義内容が理解できず、地域の問題解決や生活改善に役立てることが出来なかった受講生の農村「青年」、そして学習者の実態把握をしないまま青年たちの学問的欲求に応えようとした講師陣の学者、その三者の間に自由大学に描いた理想の”ズレ”が存在したことを明らかにしたのは、評価すべき点と言える。

また、長島伸一が、これまでの自身の自由大学研究をふまえ、『民衆の自己教育としての「自由大

学」－上田・魚沼・八海・伊那・福島・上伊那・松本・群馬（越後）川口－』（梨の木舎、2022年）を発表した。長島は、地域民衆の自己教育の場としての自由大学で、講師はどのような講義をし、聴講者はその講義をどのように受けとめ、その学びを通して各自がどのような社会的な志を立てていったのかを検討した労作である。これまで発掘されてきた諸史料・証言・文献を整理し、各自由大学の開講された講座ごとに講義内容や聴講者の評価をできるだけ明らかにしており、また講師の学問的業績や人脈、聴講者のその後の生き方をも明らかにして、自由大学の学びがどれほど豊かであったかが理解できるものになっており、これまでの自由大学研究を深化させたものとなっている。

小平千文は、「上田自由大学－地域の青年の手で立ち上げた自己教育運動－」（『季刊自治と分権』第87号、2022年）において、上田自由大学の「設立の趣旨」や運営の特徴、自由大学の広がりを概括したあと、自由大学に学んだ勝俣英吉郎、宮下周、堀込義雄の3人のその後を取り上げ、勝俣は1924年に市長になると市民の社会教育機関として上田市民大学を開講し文化市政を進めたこと、29年に浦里村長となった宮下は全村融合の村民教化思想を唱え大正デモクラシーから決別したこと、戦後神川村長となった堀込は53年の菅平鉱毒問題で地域住民を結集して硫黄採掘禁止を勝ち取ったことを紹介し、3人のあゆみは同一ではないが、自由大学がもとめたものは、時代に流されず、人権の否定や戦争への道の「防波堤ともなる確かな知識の習得であり積み重ねる自己学習であった」と指摘している。

（11）自由大学運動100周年記念集会・自由大学運動100年記念フォーラム

自由大学運動が始まってから100年の節目の年となる2021年に開催される予定であった記念集会は、新型コロナウイルス感染症の拡大のため１年延期となり、22年10月と11月に東京と上田で集会がもたれた。

東京集会は、大槻宏樹ら社会教育関係の研究者が中心となり10月30日に早稲田大学で開催され、長島伸一「自由大学100年周年の意義」の基調報告のあと、柳沢昌一「省察的民主主義（Reflective Democracy）への企図としての自由大学運動」、清水迪夫「伊那自由大学とは何か」、林重伸「阿智自由大学の現状と課題」、古市将樹「自由大学から現在の大学を問い直す」、渡辺典子「学びの場のつくられ方－大正期の上田自由大学を中心に－」、米山光儀「自由大学の影響を考える－林源と勤労青少年教育－」、大槻宏樹「自由大学（研究）への期待」の７本の発表があった。

長島の基調報告は、自由大学運動や自由大学研究で問われた事柄の中には現在においても重要な問題提起となっている事柄が数多く含まれているとし、100年という節目の時期に、「自己教育」とは何か、「学習」にはどのような意味が含まれているかなどの問いについて、現時点で再確認し、考え続けておくことは重要なことであると述べ、柳沢昌一の土田杏村の「自由大学の理念」形成過程の研究と渡辺典子の神川村における青年層の学習運動の研究を取りあげて、その研究の意義を明らかにしている。長島によれば、柳沢の研究は、自由大学は山越脩蔵・金井正と土田との相互主体的な交流の結実として生まれ、その理念も大学拡張としての自由大学理解から民衆を担い手とする教育概念・学校概念への変革という新たな問題視角に立ち、次いでプロレットカルト論を展開し、さらに土田の「自由大学に就て」「自由大学とは何か」が「自由大学の理念」の到達点を示したことを明らかにしたとし、土田による自由大学の教育は〈教育〉と〈自己教育〉との相互性が見通されており、民衆自らの主体性にもとづく自己教育運動による下からの「自由連合」によって働く民衆の〈教育⇄自己教育〉の可能性を切り開こうとしたもので、それが「自由大学の理念」の到達点であったとし、ここまで「自由大学の理念」の中身をきちんとたどった研究者はいないと評価した。渡辺の研究は、神川村の青年グループ「路の会」を発見し、その多く青年たちが自由大学で学ぶとともに青年団運動の幹部経験者であったが、身銭を切って時報『神川』（村の新聞）を発行して、村民に向けて各自の意見を紙上に

発表し、相互批判を通じた合意形成を行う〈学習の場〉が存在していたことを明らかにしたもので、その中心にいた堀込義雄がファシズムの嵐に巻き込まれずに済んだ背景には「路の会」があり、異年齢集団の中で他者と意見交換する機会に恵まれていたからではないかと指摘し、渡辺の研究を評価した。

柳沢昌一報告は、自由大学運動が普選運動を背景に生まれたことから、民主主義を改めて問うことが大事であるとし、ハーバーマスの省察的民主主義の糸口を自由大学の中に探ろうとしたものである。清水迪夫報告は、これで発表してきた伊那自由大学に関する一連の論文をもとに、その概要を紹介したものである。林茂伸報告は、2015年から阿智村で住民に学習の場を提供して学びを通じた自己成長を図る目的のもとに「あち自由大学」を開講してきたことを紹介したものである。古市将樹報告は、早稲田大学での「生涯学習概論Ⅰ」の授業で自由大学運動を取りあげた際に提出してもらった受講学生による感想やレポートを紹介したもので、この授業を通して自由大学の意義や現在の大学との比較、大学における教養とは何かを考える感想が多かったことが知られる。渡辺典子報告は、これまで論文で発表してきた神川村における「路の会」の活動や埼玉県の丹荘自由大学について紹介したものである。米山光儀報告は、1966年、伊那自由大学の運営に関わった林源が新潟県高田市（現・上越市）の有沢製作所で企業内青年学級を開設するとともに、夜間勤務の勤労青年のために高田商業高校に昼間定時制の開設を働きかけ、のちに独立した高田南城高校となり、定通制のモデル校となったことを紹介し、この林の勤労青少年教育への関与は「彼の青年時代の自由大学の経験が大きく影響している」と指摘した発表であった。大槻宏樹報告は、魚沼自由大学では村から補助金を得ていたが、日本では自己責任が評価されてきた中で、公費助成への道筋をつける必要があること、日本学術会議への攻撃や軍学共同が進む中で、「教養」の「自由」を説いてきた自由大学の理念はいまこそ生きてくること、大正デモクラシーかプレファシズムか、近代史での元号の問題を考えてみること、金井正や佐々木忠綱の生き方から自由大学運動における反戦平和を発掘する必要があることなどを問題提起する報告であった。

上田集会は、小平千文が会長を務める上田小県近現代史研究会や市民団体が実行委員会を作り、上田市教育委員会と協働して11月13日に上田商工会議所で開催され、山野晴雄の「上田自由大学運動の歴史」、長島伸一の「自由大学の理念と精神はどのようなものか」の２本の基調報告があったあと、「自由大学の理念と精神を継承するために」のテーマのもとにシンポジウムが行われ、小平千文が司会をし、山野晴雄、窪島誠一郎、清川輝基、佐藤一子、村山隆の５人による意見交換が行われた。

山野報告は、『上田自由大学の歴史』（自由大学研究・資料室、2022年）を要約するかたちで報告したもので、約10年間にわたる上田自由大学の歴史をたどったのち、自由大学運動は、日々の生産活動に従事する民衆の立場から近代日本の教育体系を批判し、新しい形態の民衆の教育機関を創造しようとする民衆の自己教育運動であったこと、上田自由大学は大正期には地域民衆の学問的教養を身につけるための学習運動として展開され、信濃黎明会の普選運動や青年団運動に関わりをもつ青年たちが多く受講していたが、再建後の昭和期には自由大学での学習を地域の変革に結びつけてゆく学習運動としての側面がみられるようになり、農村不況の状況打破を求める青年団運動や上小農民組合連合会などの農民運動に関わりをもつ青年たちが受講するようになったこと、そして上田自由大学の歴史は、大正デモクラシー期の地域民衆の文化創造がどのようなものであったかの一時例を示していることを指摘したものである。長島報告は、前半は東京集会での報告にあった柳沢昌一による「自由大学の理念」の理解を紹介したあと後半は、自由大学の精神について語り、新明正道が大学が「立身出世」の手段に堕落してしまった中で、古の塾の気迫を取り戻すべきであるとし、「自由大学は単に知識そのものを与えれば足りる」と述べているように、知識＝科学的真理を出来うる限り「素のままに提供すれば足りる」とし、「事実の探究、学問や研究が第一」であり、完成に向けた努力を継続して

行くことの重要性を説いていること、また、小宮山量平は民衆が開講した民衆のアカデミズムが自由大学であるとし、分裂体質ではなく、統一体質の人格を地域社会に増やしていくことが自由大学の精神であると説いていることを指摘し、最後に自由大学の精神にもとづく戦後開拓が２つ行われたとして、佐々木忠綱の提案による朝霧高原の開拓、山越脩蔵による群馬県嬬恋村の開拓を紹介したものであった。

このように２つの集会は総じて、60周年記念集会以降の自由大学運動研究の成果を紹介するとともに、今後の課題を提示したものとなった。

（補）戦後上田自由大学の研究

敗戦直後の1945年12月に再建された上田自由大学については、”大学紛争”が社会問題となった1969年に酒井武史が「『反大学』の源流」（『朝日ジャーナル』1969年10月19日号）において既成の大学批判としての「反大学」の源流の1つとして戦後の上田自由大学を紹介したが、本格的な研究はなされてこなかった。

その後、大槻宏樹が同編『山越脩蔵選集－共生・経世・文化の世界－』（前野書店、2002年）において山越脩蔵のもとに保存されていた関係資料を公開すると、小平千文は「あらためて上田自由大学をみつめる」（小平千文・中野光・村山隆『上田自由大学と地域の青年たち』上田小県近現代史研究会ブックレット11、上田小県近現代史研究会、2004年）において、タカクラ・テル、山越完吾、小宮山量平らによって上田自由大学が再建され、45年から46年にかけて9回の講座が開講されたことを明らかにした。また、長島伸一は、「社会認識と自立的精神－小宮山量平をめぐる旅－」（『長野大学紀要』第37巻第3号、2016年）において、小宮山量平の戦後思想を検討するなかで小宮山が関わった上田自由大学について、自立的精神を養い育てる「民衆的アカデミズム」であったことを指摘したが、自由大学の開講状況については小平の研究に依拠し、その消滅にいたる全体像はあきらかにならなかった。

山野晴雄は、すでに1984年の日本社会教育学会第31回研究大会において「戦後民衆大学運動の展開－上田自由大学を中心に－」の研究発表を行っていたが、その後の資料調査をもとにまとめたのが「戦後上田自由大学の再建と展開」（上條宏之監修・長野県近代史研究会編『長野県近現代史論集』龍鳳書房、2020年）であった。山野は、この論文で、上田自由大学の再建から消滅までの全体像をほぼ明らかにするとともに、小平論文の講座一覧や高倉テル・山越完吾・小宮山量平連名の案内状の日付の誤りを訂正した。

（2021年10月20日脱稿、2023年6月20日補筆）